

奈良女子大学構内遺跡

発掘調査概報 I

1982年

奈良女子大学

序

このたび、本学が昭和56年家政学部・一般教養棟の新営工事に先立っておこなった、同上敷地の事前発掘調査の結果がこのような形で刊行できる運びになったことをよろこびたいと思います。

発掘調査を行った本学の敷地は、現在奈良市北魚屋西町に属し、古代平城京の外京地域に在りますうえに、中世以降の興福寺門前郷、奈良奉行所跡などとしても、その所在する遺構の如何については、従来から関心が持たれていた場所柄であります。その点から、本報告は、これまで発掘調査の機会の少なかった旧外京地域の、今後の遺構解明の一端にいささか寄与することになるかと考えます。

今回の発掘調査は、本学では初めての経験で、少なからず反省させられる機会ともなりましたが、幸い奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会のご協力を得て、これを無事完了することができました。とくに、発掘調査の実際のご担当をお願いした奈良国立文化財研究所には、全面的なご援助をいただき、感謝にたえません。

以上の関係諸機関ならびにそれぞれの立場から衝に当たってくださった皆さんに、厚く御禮を申しあげます。

昭和58年3月

奈良女子大学長 後藤和夫

例 言

- 1 本書は昭和56年8月末日から10月初旬にかけて行なわれた奈良市北魚屋西町奈良女子大学家政学部・一般教養棟（E棟）予定地の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は奈良女子大学（学長 後藤和夫）の依頼で、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長 岡田英男）が担当し、山本忠尚・巽淳一郎・加藤允彦・上原真人・岩永省三が参加し、坪之内徹・桜木博文・西森平之が協力した。
- 3 本書の作成には奈良女子大学助教授村田修三と坪之内が編集を担当し、本報告部分を執筆した山本・坪之内のほか、各項の執筆責任者は文末に記した。
- 4 遺物の実測にあたっては、奈良女子大学学生落合めぐむの協力を得、遺構・遺物の写真は八幡扶桑・佃幹雄が担当し、池田千賀枝の協力を得た。
- 5 発掘調査・概報作成に際しては、奈良女子大学事務局の配慮を得た。また、出土遺物に関して高槻市埋蔵文化財センター橋本久和氏の御教示を得た。

凡 例

- 1 層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また、高さは絶対高をあらわす。
- 2 遺構の略号は奈良国立文化財研究所の方式に従った。また、遺構番号は平城京左京内検出遺構の通し番号を用いている。
- 3 土器の器種分類・軒瓦の型式は奈良国立文化財研究所で設定したものに準拠し、編年・時期区分は同研究所での成果を用いている。

平城宮土器編年			平城宮軒瓦時期区分	
大別名称	略年代	標準遺構	区分名称	比定年代
平城宮土器 I	710	SD 1900	第 I 期	和銅元年～養老 5 年（708～721）
II	725	SD 485	II 期	養老 5 年～天平 17 年（721～745）
III	750	SK 820	III 期	天平 17 年～天平勝宝年間（745～750年代前半）
IV	765	SK 219	IV 期	天平宝字元年～神護景雲年間（757～760年代後半）
V	780	SK 2113	V 期	宝亀元年～延暦 3 年（770～784）
VI	800	SB 116		
VII	825	SE 311B		

目 次

I	序 章	1
II	位置および歴史的環境	2
	1 地理的環境	
	2 平城京「外京」の復原についての問題点	
	3 奈良時代の外京二条	
	4 中世以後の歴史的環境	
III	調査の概要	11
	1 調査の目的と経過	
	2 調査日誌	
IV	遺 跡	13
	1 土層の状況	
	2 遺 構	
V	遺 物	19
	1 土 器	
	2 木製品・石製品	
	3 瓦	
VI	おわりに	31

- 挿 図
- 第 1 図 奈良女子大学構内位置図
 - 第 2 図 旧本館付近地形復原図
 - 第 3 図 家政学部・一般教養棟（E棟）付近の地形復原図
 - 第 4 図 平城京外京周辺
 - 第 5 図 現在の町名
 - 第 6 図 近世の町名
 - 第 7 図 中世の郷名
 - 第 8 図 奈良女子大学構内地区割り
 - 第 9 図 西壁北半部土層図
 - 第10図 北壁土層図（西半部）
 - 第11図 A・B期遺構
 - 第12図 C期遺構
 - 第13図 SG 2288 B細部
 - 第14図 SB 2291 細部
 - 第15図 奈良・平安時代の土器
 - 第16図 SE 2313 出土土器
 - 第17図 SK 2312 出土土器
 - 第18図 SE 2310 出土土器
 - 第19図 陶磁器類
 - 第20図 木製品・石製品
 - 第21図 軒瓦・鬼瓦

- 図 版
- 図版 1 調査地周辺航空写真
 - 図版 2 C期遺構
 - 図版 3 B期遺構
 - 図版 4 A・B期遺構
 - 図版 5 奈良・平安時代の土器
 - 図版 6 中世の土器（1）
 - 図版 7 中世の土器（2）
 - 図版 8 陶磁器類
 - 図版 9 製塩土器・土馬・木製品・石製品
 - 図版10 軒瓦

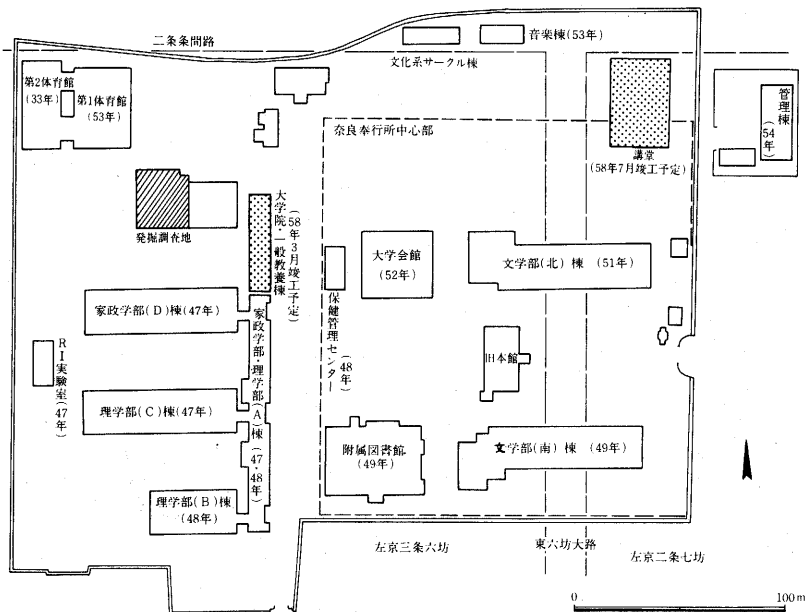
I. 序 章

調査に至る経過

この概要報告書は、昭和56年本学構内の旧奈良女子高等師範学校の寄宿寮北側2棟の跡地に家政学部・一般教養棟を増築するのに伴う事前調査として実施した発掘調査に関するものである。

本学敷地となっている奈良市北魚屋東町・同西町の地は、古代の平城京外京、中世の興福寺門前郷、近世の奈良奉行所等の関連遺構の埋蔵が予想される地域であり、また昭和48年3月発行の『奈良県遺跡地図』に掲載されて、いわゆる「周知の遺跡」に属することとなった土地であった。しかし、本学では昭和42年12月校地校舎の整備拡充計画を長期的に審議立案する長期計画委員会を発足させ、同委員会の答申に則って、昭和44年以来断続的に校舎の新築と構内の整備をすすめて来たのであるが、この間敷地内の埋蔵文化財の取扱いに対する配慮が十分でなく、昭和56年8月今回の家政学部・一般教養棟の着工に際して、事前調査に関して県教育委員会から指摘をうけるという遺憾な事態を生じた。

そこで、昭和56年8月、長期計画委員会の専門部会として、奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会を発足させ本格的な事前調査を実施することを決定し、奈良国立文化財研究所の全面的な協力をえて、同年8月27日より実施に至ったものである。

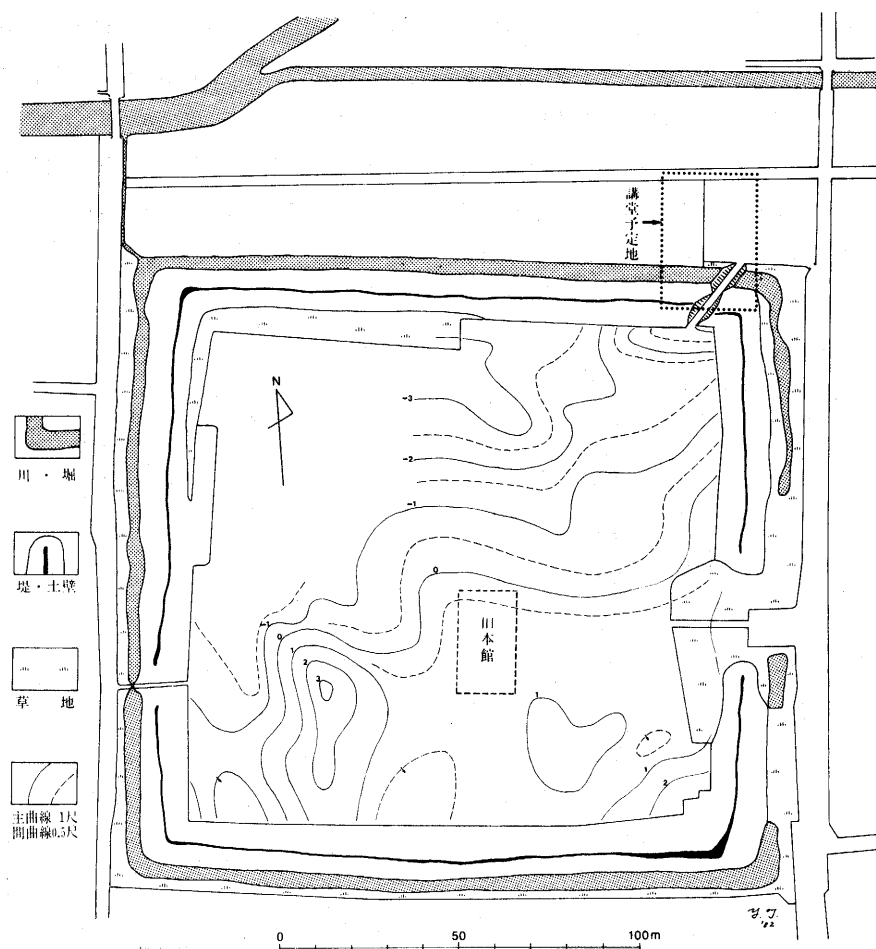


第1図 奈良女子大学構内位置図 (カッコ内は竣工年)

II. 位置および歴史的環境

1. 地理的環境

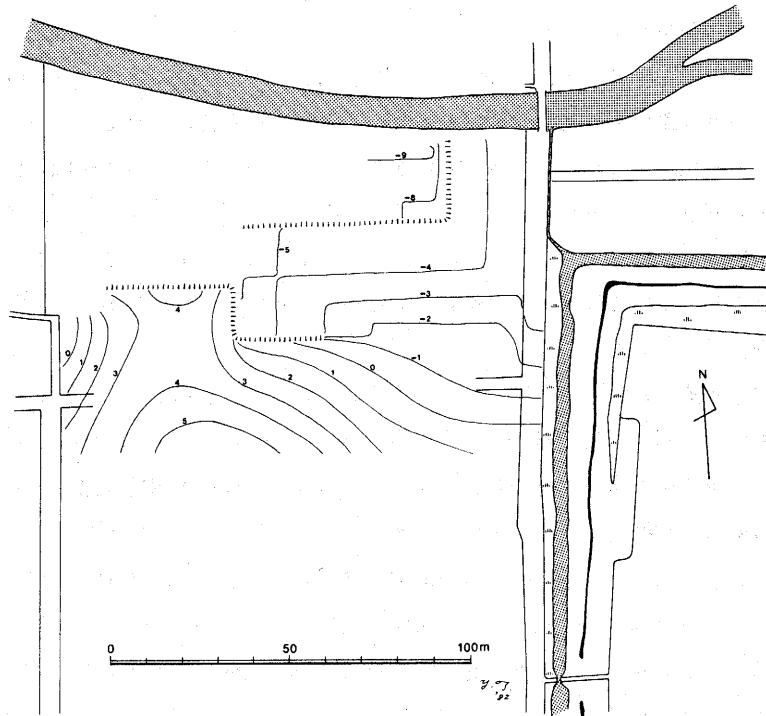
奈良盆地の東縁を限る春日断層崖の北端をなす若草山西斜面の西麓には、半ば丘陵状を呈する高位段丘が山麓線に附着するように分布しており、その西側に東大寺・興福寺や奈良市街地の主要部をのせる中位段丘が発達している。中位段丘はその中央附近において、南北方向に走る新しい断層の活動により変動を受け、その結果として、東向通りの東側に南北走向の一連の斜面―撓曲崖―が形成されている。調査地である奈良女子大学の敷地は、この撓曲崖の北端付近から西方にかけて中位段丘面が緩く北方に傾き、佐保川・吉城川水系の形成する谷底平野に接する付近にある。



第2図 旧本館付近地形復原図

調査地の東部、すなわち、講堂予定地附近では中位段丘と谷底平野の境界は不明瞭であるが西部、すなわち、家政学部・一般教養棟（E棟）付近からさらに西方に向くと共に、その境界は次第に明瞭となる。これは、東部においては緩く北方に撓み下る中位段丘面がその末端において谷底平野面に埋没するように接しているからであり、西部においては中位段丘北縁に低い段丘崖が認められるようになり、その崖下に奈良丘陵との間に発達する谷底平野が展開しているからである。

しかし、現在の地形は中世、近世、さらに現代に至る人為的改変を受けている。明治期における第貳女子高等師範学校の建設時における地形もすでに可成の改変を受けていた。敷地の造成に当り作成された測量図をもとに、当時の地形の復原を試みたのが第2図・第3図である。共に主曲線は1尺間隔、0は工事の基準面であるので、当時の相対的な起伏を示す図となる。第2図の奉行所内では南西部に築山状の高まりがあり、土囲に関連する盛土等の改変が認めら



第3図 家政学部・一般教養棟（E棟）付近の地形復原図

れるが、中央から北部にかけては全体としては緩やかに北方に傾斜していたようである。一方、第3図は敷地の北西隅に当るが、佐保川に沿う今日のテニスコート付近は工事基準面に比較して8~9尺余り低く、町家の広がる段丘面と水田として利用されていた谷底平野は、比高数尺以上の崖によって境されていた。本学敷地の西縁を画する市道の西方では、このような崖を現在も明瞭に認めることができる。

(武久義彦)

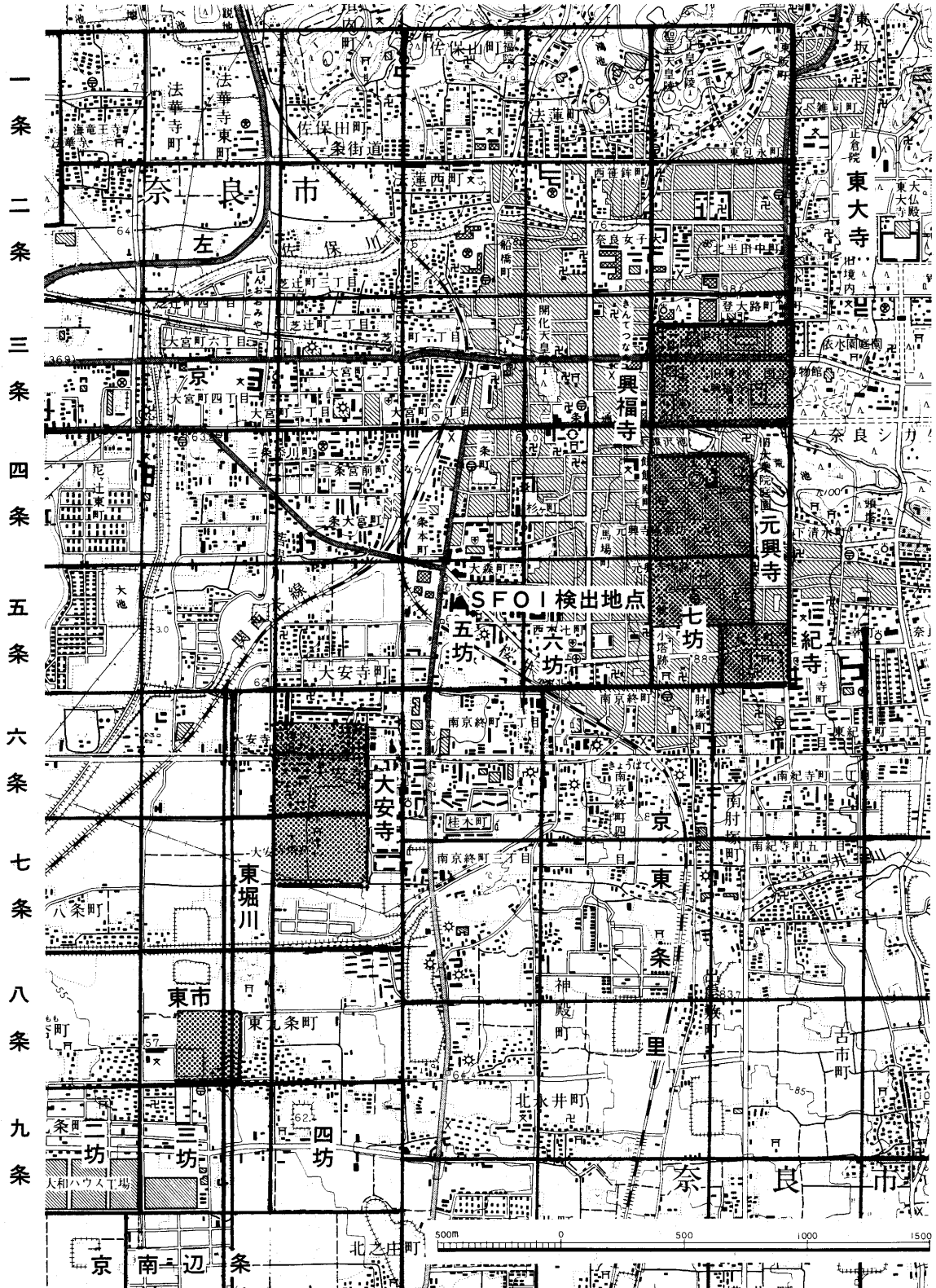
2. 平城京「外京」の復原についての問題点

平城京の「外京」とよばれている区域に対して、史料上には「外京」という名称は知られない。条坊区画において左京五坊~七坊について関野貞¹⁾が与えた「外京」という仮称が今日慣用されているものである。以下、このいわゆる「外京」の復原に関する問題点を略記しておきたい。

(1) 通説の「外京」プランにおいては、北から南に二条~五条までとするが、近年岸俊男は「東大寺山塚四至図」(正倉院蔵)に描かれた朱線の方格から、一条の存在を推定している²⁾。これについては、地割や発掘調査などによって今後検討されるべきであろう。第4図には、岸説に従って一条の部分を示しておいた。

(2) さらに、岸説に従うと、「東山寺山塚四至図」の方格から、京外にある東大寺の伽藍中軸線は、東京極大路から数えて4町目の中央を通っていたと読みとれる。この中軸線と興福寺伽藍中軸線の間隔を2500分の1地図で計測すると795mとなり、両中軸線間は6町分であるから、1町の間隔は132.5mの値がえられる。1町=450尺として1尺=29.44cmとなり、この数値は、発掘遺構に基づいて左京一坊大路から三条二坊西小路を実測して求められた値に等しい³⁾。もとより、ここでは地図上の略測であるが、「外京」造営に短い尺を用いたとする説は⁴⁾、吟味を要するであろう。

(3) 興福寺伽藍中軸線から2.5町東に、東京極大路の中心線を設定し、かつ、発掘調査によって検出された「外京」四条五坊内の坊間路(小路)(SF01⁵⁾)より、西2町を上記の尺に従って求めると、東四坊大路の位置を仮定できる。この仮定された東四坊大路は、朱雀大路から東に向かって復原された推定プランのそれに一致する。そこで、ここに推定した東四坊大路と、東京極大路の間隔を同じく2500分の1の地図で略測すると1565mとなり、1尺=29となる。このことは「外京」全体が短い尺で造られたというべきでなく、SF01の含まれる坊および興福寺の位置する坊を画する南北大路の間隔は京全体の基準に合致するが、東六坊の東西幅がやや狭いためとする見解は、考慮されてよいであろう。いま、東京極大路から西4町のところに東六坊大路を、東四坊大路から東4町のところに東五坊大路を仮定すると、前者は餅飯殿通りに、後者は今辻子町の通りにはほぼ合致する。両者によって区画される東六坊の東西幅が、他に比べて狭いとする理由として、この付近を南北に走るかなりの傾斜をもつ断層崖の存在を



第4図 平城京外京周辺

(国土地理院1972年作成 1/25000「奈良」「大和郡山」の一部を使用)

指摘する説も、⁷⁾「外京」プランを復原する上で無視できないと考えられる。

以上の推考も、今後の発掘調査や現地での実測によって、十分な検討がなされるべきことはいうまでもない。

<注>

- 1) 開野貞『平城京及大内裏考』（『東京帝国大学紀要（工科）』第3冊，1907）。
- 2) 岸俊男「平城京と社寺」（奈良公園史編集委員会『奈良公園史』所収，1982）。
- 3) 佐藤興治「平城京と平城宮」（上田正昭編『都城』（社会思想社）所収，1976）。
- 4) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅱ（1957）。
- 5) 奈良市教育委員会『平城京左京（外京）五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』（1982）。
- 6) 浅田真紀子「平城京外京の計画尺に関する一考察」（『人文地理』34-3，1982）。
- 7) 6)に同じ。

なお、小稿の内容に関しては、千田稔「歴史を地図にのせて—平城京の歴史地理—」（『地図ニース』No.122，1982）にも触れてあるので、合せて参照していただければ幸いである。

（千田 稔）

3. 奈良時代の外京二条

奈良国立文化財研究所が遺存地割と地名から復原された平城京図によれば、本学の地は左京二条六坊（11～14町）七坊（3・4町）にあたり、今回の発掘地区は11町の一部かと思われる。もとよりこの左京二条六坊11町の様子を示す古代史料は管見の限りでは皆無であり、その景観を復原することは不可能であるが、ここでは左京二条五坊～七坊のあたりについての2、3の文献を紹介して説明にかえておきたい。

周知のごとく古代の都城はまず王候・官人の居住地として条坊制が施行されたが、平城京においては左京一条～五条のみ東に三坊張り出している。これを外京とよんでいるが、左京二条五坊～七坊の様子を明らかにしようとするれば、この外京の構造にあらかじめふれておく必要があるわけであるが、外京を設けた理由はまだ不詳で、現在ではとくに外京としての特殊性が指摘されるわけではない。

都城がすべて住宅によって占められていたわけではないことは、しばしば指摘される場所であるが、この外京二条も例外ではなかったようである。八世紀前半期の記録は全くみられず、八世紀後半—東大寺造営以後の記録による限りは、この地域は東大寺にとっての要地であったらしい。例えば770（神護景雲4）年5月には七坊にあった普光寺の家地と六坊にあった東大寺の寺地とを交換しており（『大日本古文書』巻6）、804（延暦23）年6月には、多治比真人弟笠は佐保河辺の家地1町を山城国相楽郡蟹幡郷の東大寺地1町と相換し、従三位紀朝臣勝長は五坊七坪の家地1町2段124歩（これは一坪にあたる）と「五丈草葺屋一間」とをやはり蟹幡郷の東大寺地2町余と相換している（『平安遺文』第1巻）。このように東大寺が二条五～

七坊に寺地を集積しようとしたのは、それが東大寺境内に接する地であるとともに、佐保川の水運とも関連していたのではあるまいか。この地は決して京城の端の淋しい地ではなかった。多治比氏や紀氏など前代からの伝統的名族の家地とともに、例えば渡来系氏族である船木麻呂の家は六坊の地にあった。(『大日本古文書』巻6)。そのほか廣上王の地も七坊にあった。このように比較的家地が多い地域であったことは、平城京廃都後約150年後の950(天曆4)年七坊にあった東大寺地3町7段余のうち3町余は東大寺の雑人・仕丁等の居住地であったことから推測できる(『平安遺文』巻1)。

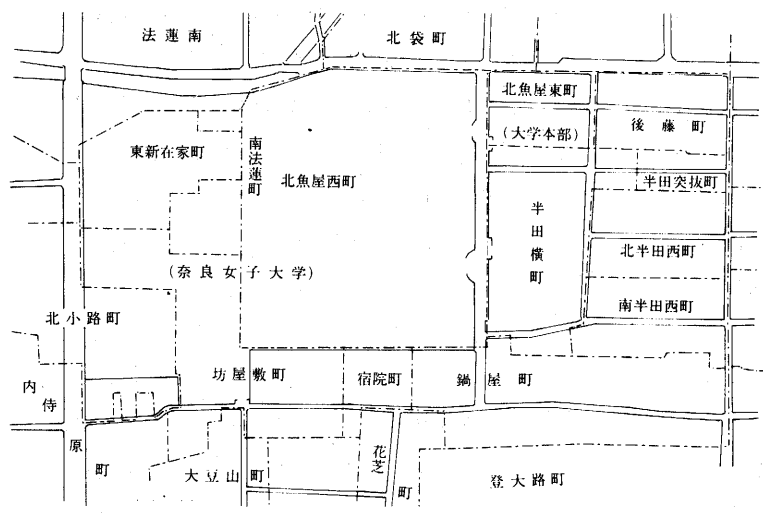
もとより家地が密集していたわけではない。平城京廃都後のことではあるが、804(延暦23)年に紀朝臣勝長から東大寺が相換して得た五坊七坪の1町2反余の土地のうち7反は809(大同4)年までに開発されている。また、770年に普光寺が東大寺と相換して得た六坊の地一区は1町の4分の3の土地であったが、それは「東北大道、東南日置広庭畠、南小道、西此寺(東大寺)、北大道」とあるように、道路と寺地・畠にかこまれていた。このように畠も点在したのであるが、それと同時に、この地の東側は必ずしも直線的な道路によって区画されていたわけではなく、北から東へ大道は曲っていたらしいが、あるいは佐保川の流路とのかかわりがあるのではあるまいか。おそらく点々と畠はありながらも、比較的家地の多い地区であったと予想されるのである。

また『万葉集』には「大伴家の佐保の宅」や「長屋王の佐保の宅」などの語がみえ、他の万葉歌人をも含めて、その宅地を考証しようとした論考もある(例えば川口常孝「奈良朝歌人住宅地考」<『万葉集研究』第六集>や大井重二郎「佐保丘陵の権門」「平城京条坊内の万葉歌人の居住地区」<『万葉集歌枕の解疑』所収>など)。長屋王の邸宅の故地については『大和志』には佐保殿址として「南都宿院町ノ西ニ在リ、左大臣長屋王ノ亭ト相ヒ伝フ」とみえ、本学の西側の地ということになる。また大伴家持邸の故地については、本学の地に求めようとする説もある。(坂口保『万葉集大和地理辞典』なお川口常孝『大伴家持』には諸説が詳しく紹介されている。)これらはいずれも奈良時代に「佐保」がどの一帯をさし示していたのか、その地域的範囲を検討することが先決である。しかし、ここでその点を論ずる準備もなく、上でふれることのできなかつた平安時代の諸問題とともに、次の機会に検討を加えることにしたい。

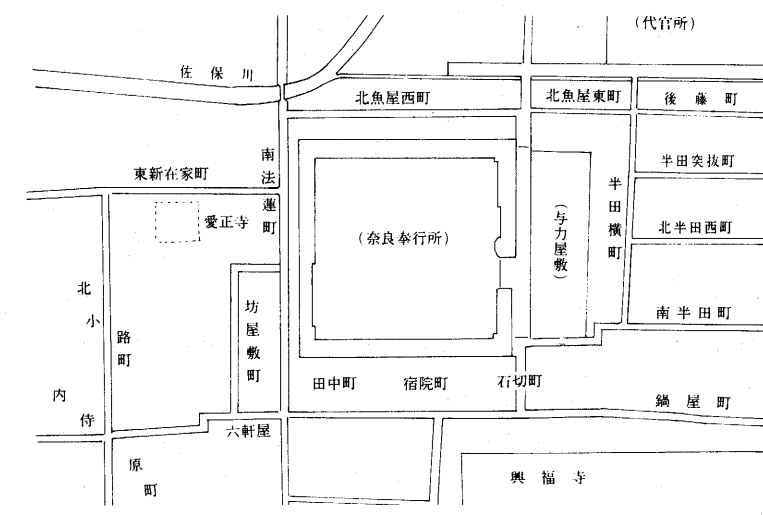
(佐藤宗諄)

4. 中世以後の歴史的環境

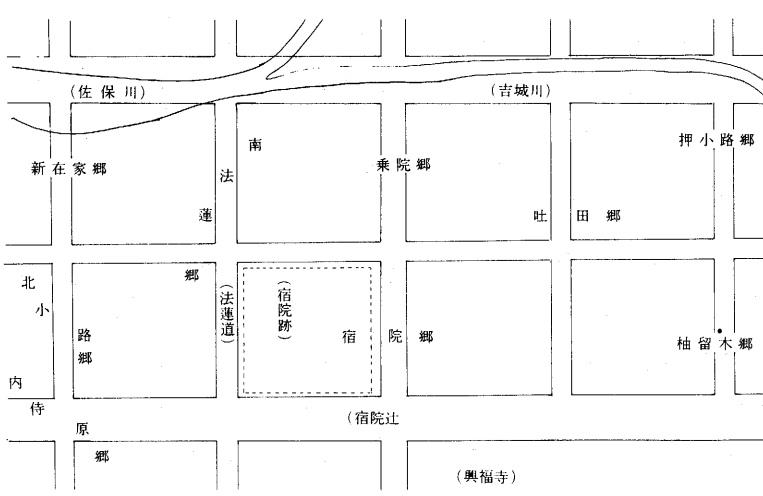
奈良女子大学附近の現在の町名は第5図の如くで、これは近世の町名(第6図)を引継いでいる。但し、近世の奈良奉行所の範囲は町名が除かれていたのを、奉行所廃絶後にその北側の北魚屋西町の町名に含めた。南法蓮町は元は東の方に及んでいたのが、奉行所の境内に取込まれて狭まったと思われる。同様に、奉行所の南側だけになっている宿院町も、元はもっと北に広がっていたと思われる。このことを考慮して中世の郷の所在地を推定したのが第7図である。



第5図 現在の町名



第6図 近世の町名



第7図 中世の郷名

(道路は便宜的に条坊推定図に従う)。郷名は『大乘院寺社雑事記』文明12年(1480)6月19日条の南都七郷在所注進と享禄2年(1529)「光明院実暁僧正奈良七郷記」(『奈良坊目拙解』所引)による。該当する郷は北御門郷で、

この郷はさらに下北小路・宿院・真(新)乗院・押小路・吐田・南法蓮・柚留木の七つの小郷から成っていた。

宿院郷は古代の宿院跡の周辺に形成された郷である。宿院は春日祭や興福寺維摩会に朝廷から下る勅使を饗応する宿所で、宿院饗所・宿院御所とも呼ばれ、設営を担当する官の宿院司が置かれた。修理料田として宿院名が設けられた。「江家次第」によ

ると、2月6日に「上卿先着宿院饗所、催諸司使内待等、有坏饌、三献或一献、使々来集列見辻」と上卿以下の参着の際の儀式が定められていた。実際に宿院に赴いた記録が「定家朝臣記」康平5年(1062)2月6日条、「中右記」寛治6年(1092)・嘉保2年(1095)各同日条、「山槐記」保元4年(1159)2月11日条に見える。宿院と類似の施設に、今日の奈良高校附近と推定される佐保殿があったが、これは藤原氏の氏長者の宿所であり、宿院とは区別されていた。しかし宿院も事実上藤原氏の管理するものであったから、佐保殿との使用上の区別はあいまいになったようで、「大乘院寺社雑事記」文明10年(1478)10月17日条に「宿院・佐保殿ハ殿下之春日御参宮之御神事之在所也」と記されたように、共に藤原氏の施設とみなされるに至った。

宿院は鎌倉時代に入ると漸次使用にたえなくなり、修理工料田の宿院名100町が興福寺寺門領として維持されるのみとなった。前引の「大乘院寺社雑事記」の記事に、「宿院御所之旧跡者興福寺之戌亥角也、四辻子於北行一丁計行而、西に東西行ニツシアリ、其奥則宿院御所ナリ、ツシハ彼御所ノ馬場也、今ハ細道ニ成テ馬場トハ不見、御所跡ハ広畠也、西ハ法蓮ノ道ヲ限者也」「彼宿院御所跡何者欤令領作畠哉、不審事也、東西南北一丁宛四方一丁ツ、也、則興福寺之戌亥角ヲ号宿院辻也」とある。文明10年当時は広い畠になっていたことがわかる。その所在地は、興福寺の西北の角の四つ辻(宿院辻)を北に1丁程行った所にある東西の辻(馬場跡と伝えるが元来は条間小路か)の西の奥だという。又その境内は東西・南北とも1丁宛の正方形であるというから、東西辻の奥にあるというのは宿院の中心的な建物の所在地を指すのであろう。この方1町の推定範囲は第7図に示した如く、条坊路で区画された1坪分、即ち左京二条六坊十二坪に相当する。

廃墟となった宿院の境内には、中世を通じて漸次堂舎や人家が建て込んで行ったもので、宿院辻と呼ばれた四つ辻を中心に宿院郷が形成されるに至る。「大乘院寺社雑事記」によると、文明年間に当地には「宿院之布売」、「宿院紙屋春藤丸」などの商人が居住していた。又15世紀末頃から宿院在住の番匠工(木寄番匠)が仏師の下働きとして活躍しはじめ、16世紀中頃には宿院仏師を名乗って独立の仏所を組織した。天文14年(1545)以後仏師として宿院源次、同源二郎、同源三郎、同源四郎等の名が造像銘に見える。彼等は南都仏所の正統派を継ぐ椿井仏師に代って、在地土豪や村落の造像需要に応じて抬頭した新興の仏師であった。(上原昭一編『室町彫刻』)。当地は宿院廃絶以後しばらく南都七郷のいわば場末に近い場所であったが、中世後期に新興地として活気を見せはじめた様子がかがわれる。

宿院辻は郷民の群集する場所になったようで、時には印地(石合戦)が行なわれた。戦国動乱期に入ると、南都防御の拠点にも使われた。永正4年(1507)9月、京都の細川政元政権の遣わした赤沢長経軍を迎撃した衆徒・国民勢の内、箸尾氏が宿院の堂に陣取った。10月には赤沢軍から討取った頭を宿院辻にさらした。永正17年5月の筒井・古市両軍の合戦時には筒井方の大将中坊美作が宿院の町に「カイトテ」(矢倉)をあげて陣取ったが、古市勢が夜討して真乘

院郷悉くと宿院郷少々を焼いたという。以後しばしば当地で陣取り合戦が行なわれた。永禄9年（1566）12月、宿院辻に松永久秀方が築城して多聞城の前線基地とした。翌10年5月に三好・筒井方がこの宿院城を攻めて敗退し、松永方は城の火の用心のために周辺の寂福院・金龍院・尊蔵院を毀った。永禄11年6月には筒井方が「喜多院ノ北ノ方石切ノ町」に「ヤクラ屏」を備えた城を築いた（以上『多聞院日記』）。このように宿院辻周辺には堂舎にまじって民家が建て込んでにぎわったあと、戦国末期の戦乱で築城と焼亡をくりかえして、近世初頭にはかなり荒廃した状況を呈していたと思われる。

築城と荒廃という事態は西北の北小路郷にもみられた。ここには飯田氏の居城があったが、天正13年（1585）に豊臣秀長に接收された後削平されたと伝える（「大和軍記」、「奈良坊目拙解」）。これらの城の範囲が奈良女子大学構内のどこまで及んでいたかは、今のところ不明である。

以上のように、当地が中世末期に軍事的な要衝の地となり、更に荒廃して空地が多かったという事情が、近世初頭に奈良奉行所の設営されたことの一つの要因になったと思われる。奉行所は慶長8年（1603）から翌9年にかけて「惣構ノ堀」を掘ったと伝えられる（「庁中漫録」）。この境内に一部かかっていたと思われる坊屋敷町について、初期の奈良奉行に任ぜられた中坊氏の旧宅地に由来するという伝承があるので（「奈良坊目拙解」）、中世末期に筒井氏の下で奈良の市政を管掌した中坊氏との関連も重視さるべきであろう。この奉行所は巾7～9間の堀を四周にめぐらし、外周が東西93間、南北93間半の方形で、近世の奉行所としては類を見ない規模である。

奉行所の西側、堀外を南北に通る道を法蓮道といい、これに沿って中世後期に南法蓮郷が形成されたが、奉行所建設によって道の東側は境内に取込まれた。この道沿いの町の西側の東新在家町、東側の北魚屋西町（奉行所の北裏）は、ともに寛永年間（1624～43）に民家が建ちはじめた新地である。北魚屋西町はその名の如くしばらく魚屋が軒を並べていたが、享保20年（1735）の「奈良坊目拙解」編纂時にはなくなっていた。今回の発掘調査地は東新在家町に属し、この一角には愛正寺という寺があったが、由緒は不詳である。これらの近世の町は宝永元年（1704）の南都大火で、北魚屋西町を除いて類焼した。

明治維新で奈良奉行所は廃され、明治2年（1869）、跡地は奈良県に払下げられ、しばらく育苗所となっていた。明治41年（1908）ここに奈良女子高等師範学校が設置された。当初奉行所跡地だけを使用する計画であったが、附属高等女学校を併設する見通しとなったので、敷地を北へ佐保川まで拡張してから着工し、次いで西へ拡張して附属小学校を建設した。そのため着工直前まで残されていた奉行所の土塁は崩され、堀は埋められた。南北通りの法蓮道は構内に取込まれた。さらに東新在家町の東西の道路をまたいで寄宿寮が建てられた。今回の発掘地はこの寄宿寮によって攪乱された部分にあたる。

（村田修三）

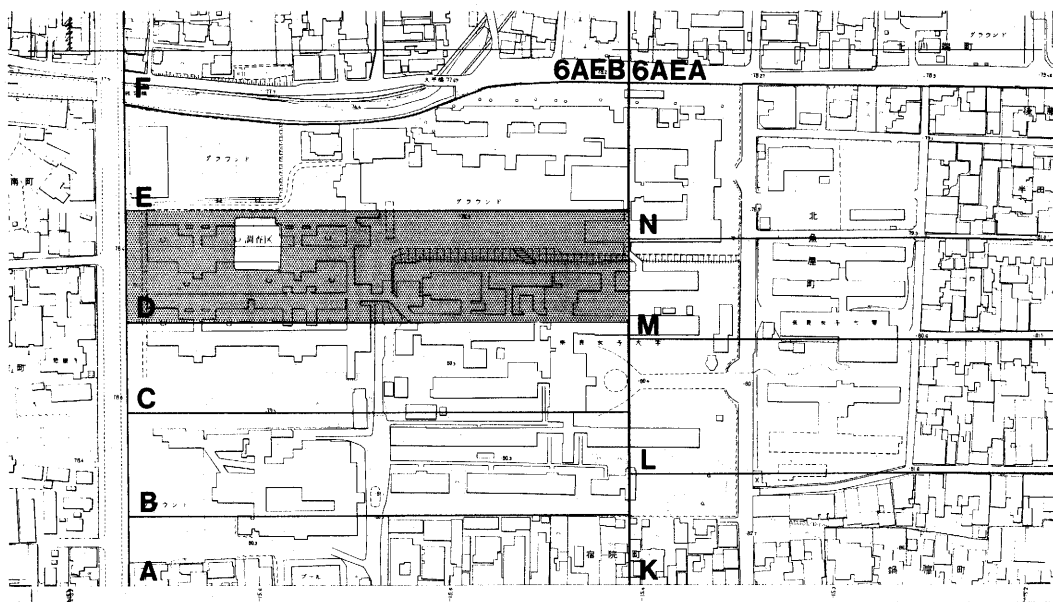
III. 調査の概要

1. 調査の目的と経過

平城京域においては、1960年代後半になって開発事業に伴う事前調査の件数が飛躍的に増大した。その結果、平城京の骨格をなす条坊街衢の位置や規模、坪内の宅地割や建物配置およびその変遷など、多大の資料が蓄積されてきている。ところが、左京の東に張り出した、五条以北、幅3坊分の外京に関しては、旧来から市街地化していたこともあり、調査の手が及ぶことは稀れであった。しかし最近数年間、再開発の波が押し寄せてきたことにより、調査の機会が増加しつつある。奈良女子大学構内遺跡の調査もこの一環として位置づけることができよう。

今回の家政学部一般教養棟計画用地は、この外京の北寄り、平城京左京二条六坊十一坪にあたるとともに、中世、興福寺の宿院が存在し、近世にも奈良奉行所に近接する街区が想定されるなど、水田化した他地域とは異なる経緯をたどってきた。1000年を超える当地の歴史を解明する上で発掘調査に期するところ大なるものがあったのである。

調査は、奈良女子大学の依頼により、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当した。同部の調査回数では第134次にあたる。建設用地は東西50m、南北25mの1250㎡であるが、東半部については既に基礎パイルが打ち込まれていたため、発掘対象地は西半部に限られた。発掘面積は25×25mのうち東北隅の一部を欠く約650㎡である。なお、調査の便宜をはかるため、昭和37年度作製の1000分の1地形図を用いて地区割りを設定した。調査地(十一坪のほぼ中央やや東寄り)は6AEB-D地区に属する。



第8図 奈良女子大学構内地区割

2. 調査日誌（1981年8月27日～10月6日）

8月27日 調査開始。調査前現況写真撮影。縄張り（東西25m、南北20m）。バックフォワーにより表土排除。表土は薄く、南半では表土直下が地山とおぼしき黄褐混礫土となる。ベルトコンベヤー用の電線敷設。

8月28日 雨。午後、表土排除続行。南半で遺構の検出が望めない状況なので、発掘区を北へ5m拡張。表土剥ぎ終了。女高師時代の建物基礎が処々で顔をのぞかせている。

8月31日～9月3日 地区杭打ち。北端から発掘開始。黒褐色混礫土をさげながら南へ進む。現代のごみ捨て穴多数、南方では井戸と思われる土壌あり。女高師寄宿舎の束石、レンガ積、埋甕などはすべて除去する。

9月7日～9月14日 南端から地山と考える黄褐混礫土面で遺構検出。鎌倉末頃を最古とする素掘りの井戸ないし土壌数基以外に顕著な遺構なし。北半は地山面がさがり、黒褐色の厚い包含層がある。瓦器・土師器皿類を多量に含む。

9月14日～9月17日 北半部で黒褐土下位の茶褐土を掘りさげる。中世を主体とし近代までの遺物が混在する。西壁沿いに幅60cmほどを深掘りした結果、黄褐混礫土は地山と確定。中央部の地山が傾斜するあたりに鉾津・輪羽口が多い。

9月17日～9月21日 北半部茶褐土下の黄褐土面で遺構検出。西半部では大小様々の土壌が密集する。鎌倉ないし室町頃の遺物を含む。ようやく近世から脱したか。検出遺構の写真撮影

9月21日～9月24日 遺方設定。平面実測。

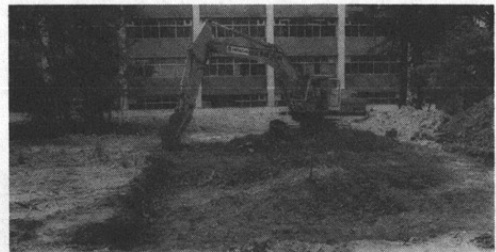
9月24日～9月28日 北半部における下層遺構の有無を確かめるため、西端および中央部の2カ所で幅6mのトレンチを入れる。双方で、約20cm下方において石列を検出したため、両トレンチ間をすべて掘り下げ、遺構検出をおこなう。西端で柱穴列および石溝2条中央部北壁沿いで池の護岸かと思われる塊石列を検出。写真撮影。

9月29日～9月30日 平面実測。ダメ押し。さらに下層の池に伴うと思われる石組溝を発見。発掘区東端にトレンチを設け、石組溝の行方を確認。写真撮影。

10月1日 土層図作製。遺構保全用に砂養生し、すべての作業を終了。塊石護岸の池をこわせないので、下層池の様相が判明しないのが心残りである。

10月3日～10月4日 重機により埋め戻し。

10月6日 終了写真撮影。



調査風景 上：表土排除 下：遺構検出

IV. 遺 跡

1. 土層の状況

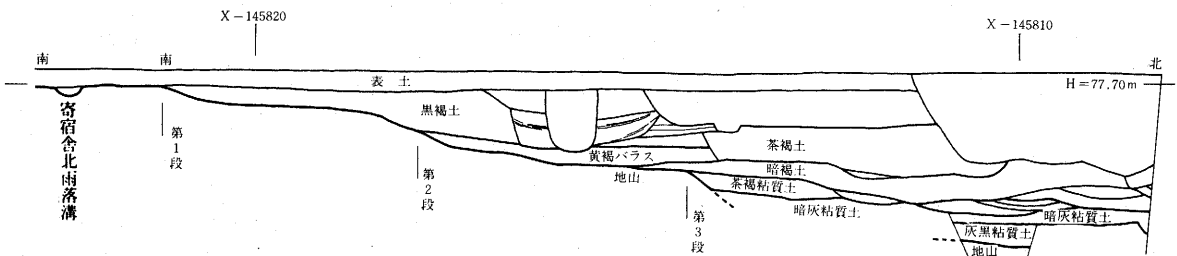
調査地は西流する佐保川を北にひかえた河岸段丘の肩部にあたり、発掘地の中ほどを境にして、南半と北半とでは土層の様相が大きく異なる。南半部では、厚さ 10cm 内外の表土を剥ぐと直ぐに平坦な地山が現われ、この上に鎌倉時代末期から昭和に至る遺構が営まれていた。一方、北半部は北に向ってさがる傾斜地で、3段にわたって徐々に低くなる。そして各段の北側には、段の落ちにみあった堆積土ないし整地土が認められ、発掘区西壁の観察では、上から黒褐土（第1段目）、黄褐バラスおよび茶褐土（第2段目）、暗褐土・茶褐粘質土・暗灰粘質土および灰黒粘質土（第3段目）の7層に大別できる（第9図）。

北半部で検出した遺構はすべて第3段目に対応する暗褐土層より下位の3層に伴うもので、各層に包含された遺物および各層上面から掘り込まれた遺構中に含まれた遺物によって、おおよそ暗褐土は江戸時代、茶褐粘質土と暗灰粘質土は鎌倉～室町時代、灰黒粘質土は奈良時代に比定することができる。なお、暗褐土面では明確な遺構は検出されず、2カ所にわたって鉦濠や韃羽口片が散布する状況を確認したにすぎない。

2. 遺構と時期区分

検出したおもな遺構は園地1、これに伴う石組溝3、掘立柱建物2以上、建物に伴う雨落溝2、井戸4、土壇14以上などで、層位、切り合い関係および出土遺物によってA～Cの3時期に大別でき、これは先の土層の区分ともおおむね対応する。

A期 北に傾斜する地形を利用して、園池SG 2288 Aが造成される。造成前にも、地山の傾斜第3段目以北で発掘区中央部寄りには池状の窪みがあったらしい。というのは、西壁土層の最下層である灰黒粘質土は発掘区東端に入れたトレンチにおいても認められるが、中央部の所



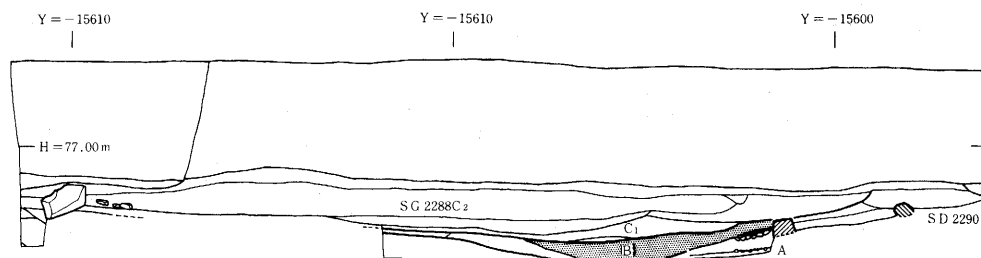
第9図 西壁土層図(北半部, 縮尺1:100)

見では、替りに灰青色混砂粘土および灰白色砂という2層にわたる堆積を確認したからである。当初はかなり広範囲にわたって低湿地であり、ここに灰黒色粘質土がたまり、やがて中央部に残った窪みに灰白色の砂そして灰青色混砂粘土の順に堆積したのと考えられよう。灰黒色粘質土および灰白色砂は平城宮土器編年Ⅲ～Ⅳの土器のみを包含するが、灰青色混砂粘土は平安時代初頭のを混えている。

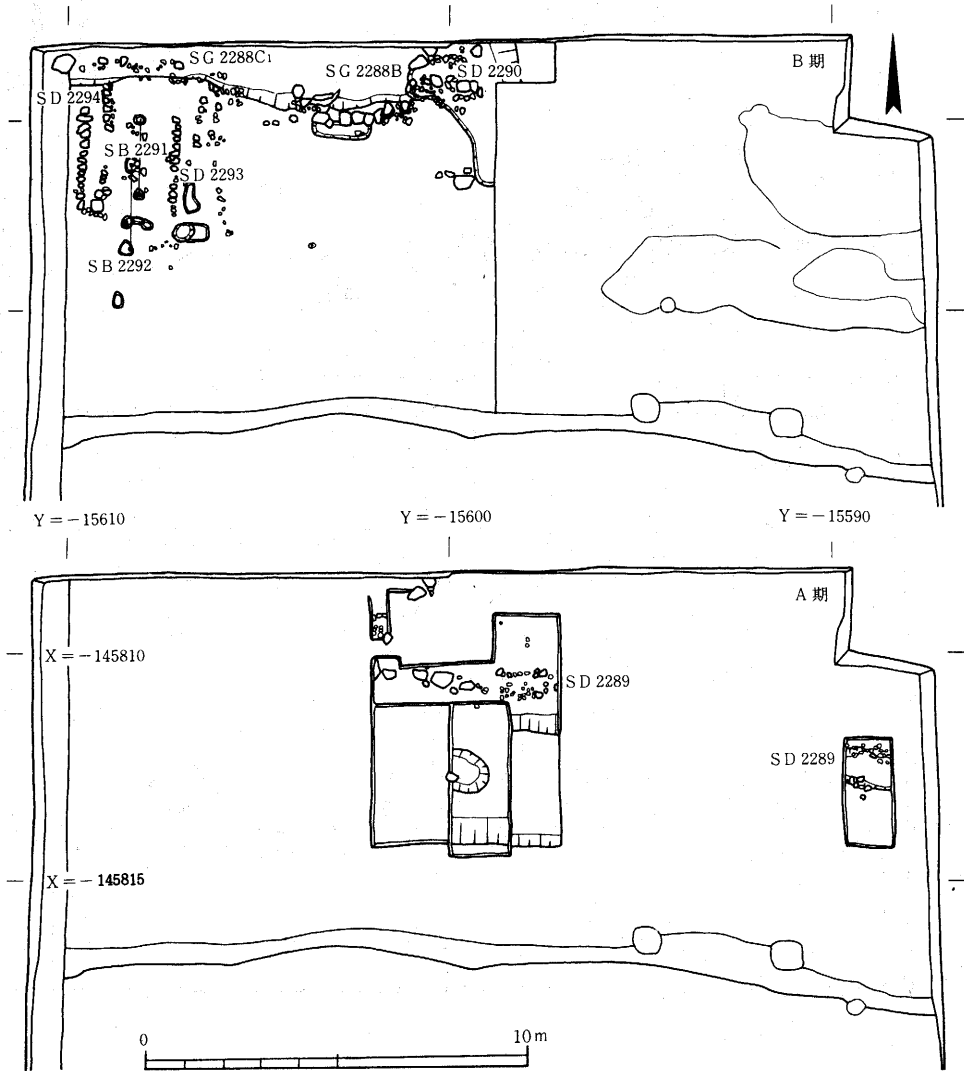
園池として整備されたのは灰青色混砂粘土層が形成された後のことと考えられる。園池への取水用と思われる石組溝SD 2289がこの層を掘りこんでつくられているからである。SD 2289に対応するSG 2288 Aは平面では確認できなかったが、北壁の土層観察によると地山直上にゆるく西方へ傾斜する小礫敷があり、礫敷の上に腐蝕物をまじえた砂の堆積が認められることから、これが汀に近い池底の一部であると判断される。礫敷上の堆積層およびSD 2289埋土から、須恵器杯・蓋・横釜などの土器類および軒平瓦 6721 G型式が出土しており、これら遺物の年代によって、園池SG 2288 Aが造成されたのは奈良時代からさほどへだたらぬ時期、おおむね平安時代初頭頃と考えられよう。青灰色混砂粘土層は、ほぼ同時期の遺物を含むので、SG 2288 Aを造成する途時に施された整地土であるかもしれない。なお、SG 2288 A堆積土中の上位から、12世紀中葉ないし後半頃に比定できる青白磁盒蓋が出土しており、SG 2288 Aは少なくともこの頃までは存続していたことになる。SG 2288 Aの規模や護岸の状況などについては不明であるが、発掘区西壁には池底の礫やその上の堆積層が及んでいないので、次項で述べるB期の園池と同規模であったと推定できよう。

発掘区東端近くに設けたトレンチにおいて、SD 2289の東延長部を検出した。溝底のレベルは75.70 m、池付近では75.56 mである。地山の傾斜にしたがって、東南方から水を導いた、つまりこの溝は取水用であったと判断できる。

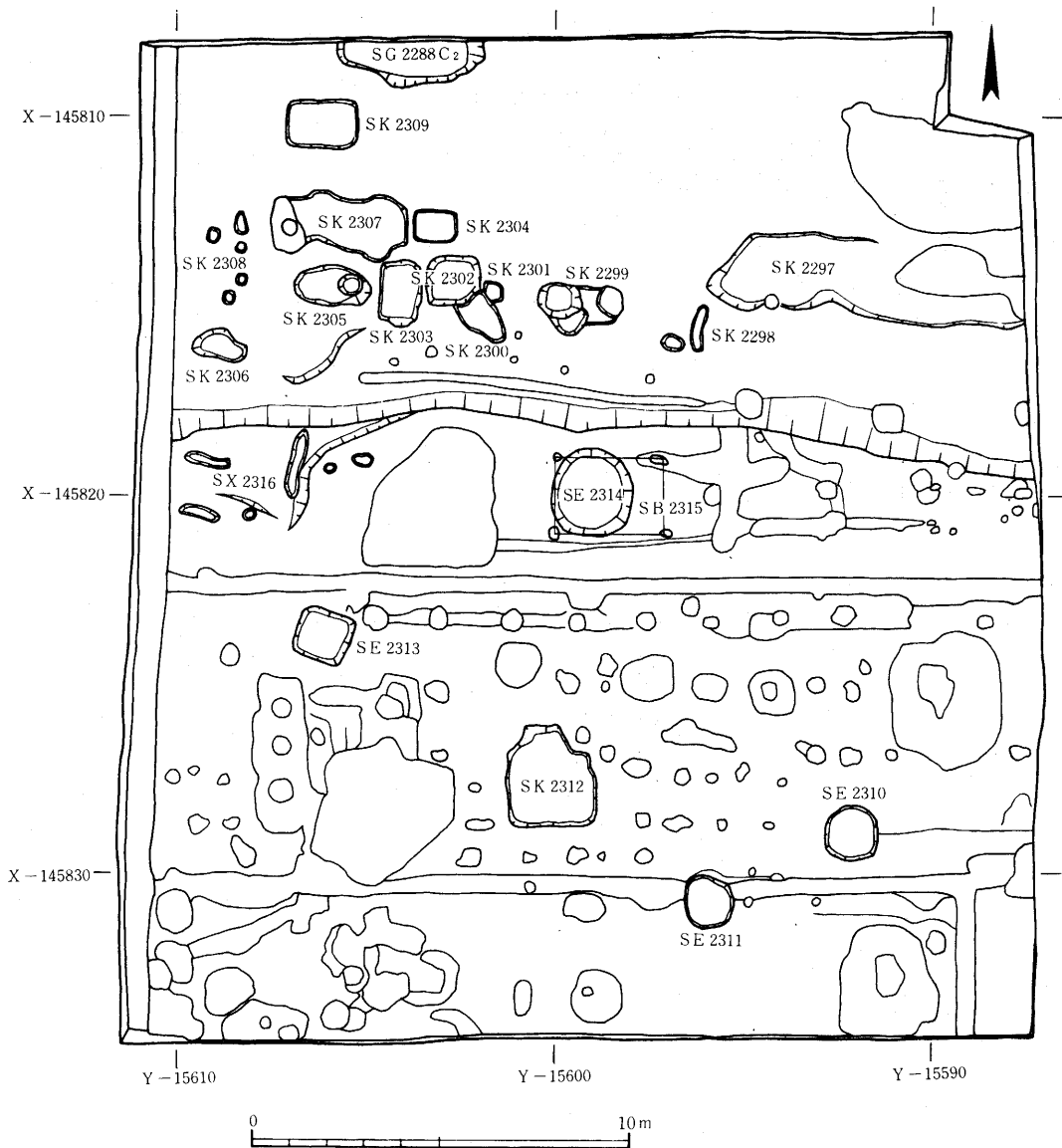
B期 園池は鎌倉時代頃改修され、SG 2288 Bとなる。位置はA期をほぼ踏襲する。発掘区北壁沿いでその南端部を検出し得たに過ぎないが、自然石の塊石で護岸し、汀に沿って礫を敷いた本格的な園池である。SG 2288 Bの西岸は、C期の造作によって破壊されており確認できなかったが、A期と同じく発掘区西壁にまでは及んでいないこと、西壁近くで検出したB期の建物SB 2291に伴う雨落溝SD 2293・2294はのちの園池SG 2288 Cによって切断されている



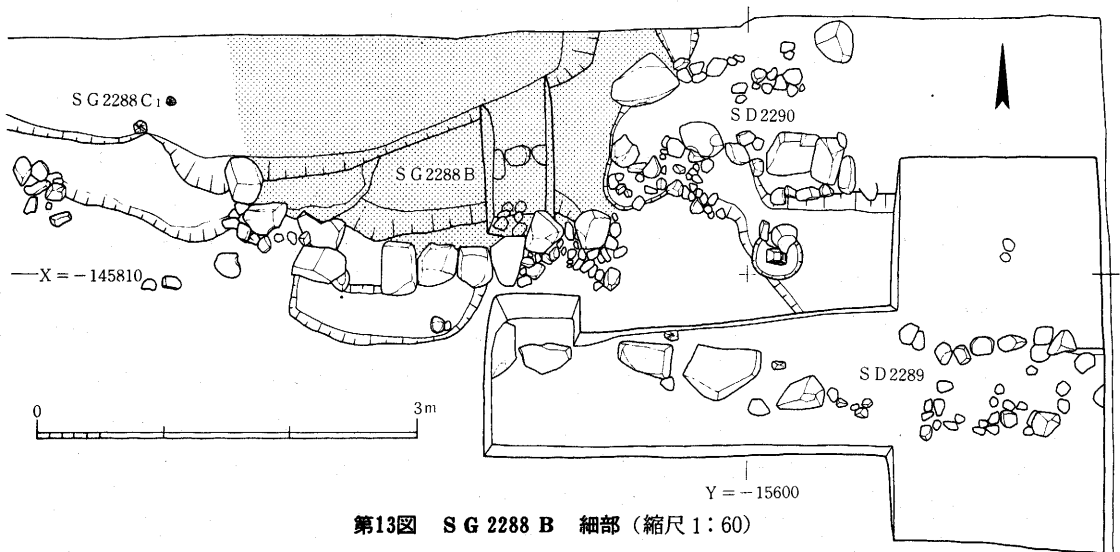
第10図 北壁土層図（西半部）



第11図 B・A期遺構（北半部 縮尺1：200）



第12図 C期遺構 (縮尺 1 : 200)



第13図 SG 2288 B 細部 (縮尺 1:60)

がもとはさらに北方へと延びていたと考えられること、またSG 2288 Bの護岸石列が現存西端部で北へ屈曲することから、SG 2288 Bの幅は南端部で約3.5 mほどであったと判断した。北壁土層においても池中堆積土である混砂灰黒粘土・灰褐混砂礫土が護岸石屈曲点に対応して立ちあがっており、この点も傍証となる。

池の東南隅から東方へ向って塊石列が2本並行する(SD 2290)。SD 2289と同様の機能をもつ取水施設とみられるが、あるいはSD 2290のさらに東方に導水溝がとりつく可能性もある。園池は茶褐色粘質土面から掘り込んでいる。この茶褐粘質土は13世紀頃の瓦器等を包含しており、SG 2288 Bの上限を示す。

発掘区西北部において、茶褐粘質土で1対の柱穴SB2291を検出した。ともに径30cmほどの円形掘形内に約20cm角の柱根が遺存する。両者の間隔は2.0 m(約6.6尺)である。東西に玉石を並べた雨落溝SD 2293・2294を伴う。溝幅(内寸法)は30cm内外、溝心心距離は2.4 m(約8尺)である。この位置に庭園の西辺を画する塀のような施設があり、1対の柱穴はそこに開く柵門であった可能性が強い。ただし、門の南北には塀の痕跡は全く認められないため、あるいは生垣のようなものであったかもしれない。なお、先述のように、雨落溝SD 2293・2294の北部はのちの園池SG 2288 Cによって切られている。また、SB 2291の南西部にほぼ並行する1対の柱穴がある(SB 2292)。これはSB 2291のつくり替えと考えられよう。径35cmほどの不整円形の掘形内に径6 cmほどの円い柱根が遺存している。柱間は2.2 m(約7.3尺)である。

C期 SG 2288 Bは江戸時代初期頃に改作され、SG 2288 Cとなる。西岸を発掘区西端まで拡張、池幅は9 mとほぼ3倍の規模となる。東半部はB期の護岸石をそのまま利用、西半部には小振りの塊石を主とし、要所に巨大な自然石を配したようだ。発掘区西北隅の巨石がその一端を示している。SG 2288 Cは江戸時代のある時点で廃絶し、いったん埋められるが、その後

明治になって整地されるまで、浅い窪みとしてその名残りを留めていた。

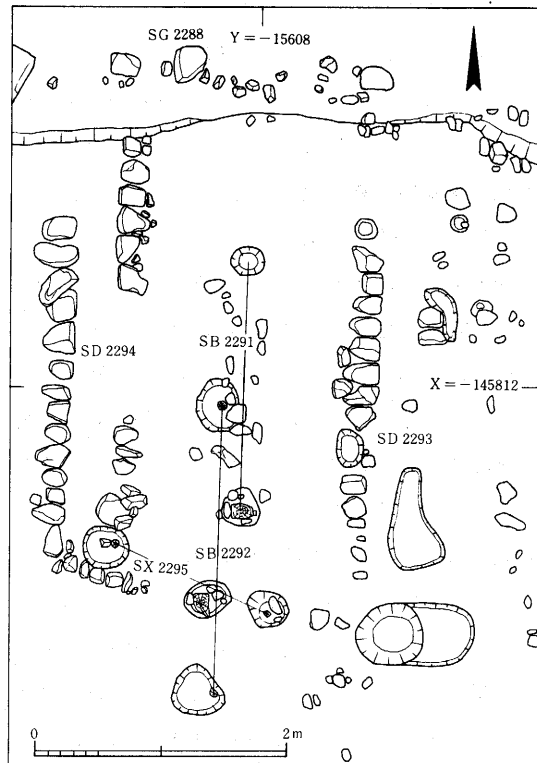
地上段上および北側の第2段目に対応する茶褐土・暗褐土面で検出したC期の遺構は、出土遺物によってC₁・C₂期に細分できる。C₁期に属するのはSE 2310、SK 2312、SE 2313、SE 2314、SB 2315（以上地山段上）および段以北の茶褐粘質土面で検出した土壌群SK 2297～2309である。これらは出土した遺物から鎌倉末～室町時代頃に属するものとみられる。鉾澤や鞆羽口片、焼土を多く含んでおり、前述の地山が傾斜する付近で発見された同様の遺物はこれらと同時期のものであろう。

SB 2315は1間×1間、柱間3.0m×2.0mの小規模な建物で、ちょうど井戸SE 2314を覆う位置にあたるので、井戸屋形と考えられる。このSE 2314は円形の素掘りであり、井戸枠は遺存していない。SE 2313は1辺1.4m内外の正方形プランの素掘りの井戸で、埋土から13世紀末頃と考えられる硯が出土した（第20図2）。また、土壌SK 2312も不整ではあるが1辺2m強の正方形プランを呈し、あるいは井戸であるかもしれない。埋土から「東大寺」の文字を瓦当に持つ軒丸瓦（第21図10）が出土している。

C₂期に属する遺構としては、地山段上のSE 2311がある。江戸時代のものである。その他、多くの土壌、溝等を検出したが、すべて女高師寄宿舍建設以降に掘り込んだ遺構である。

まとめ 以上のように、当地は遅くとも奈良時代には生活の場となり、現代に至るまで使われ続けてきたことが判明した。検出した遺構のうち、特にB期の園池およびその西を画する門状遺構は、本格的な庭園が造営されたことを示しており、園池はさらに平安時代初頭にまで遡る可能性もあることから、極めて重要な発見と言える。当地域一帯が、A期・B期を通じてどのような性格を有していたかは、今回の調査では捉えることができなかったが、今後おこなわれる構内遺跡調査に一つの指針を与えることができた点においても貴重な成果があった。

なお、幸いなことに庭園遺構は建物用地からかろうじてはずれているため、保存することができた。全貌を明らかにするために学術調査がおこなわれる日を待ちたい。



（山本忠尚）

第14図 SB 2991 細部（縮尺1：60）

V. 遺 物

出土した遺物は土器と瓦が主で、少量の木器・石製品がある。時代は奈良から現代におよんでいる。

1. 土 器 (第15～19図、図版5～9)

土器は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器等の日常雑器が圧倒的に多く、少量であるが、弥生土器片・埴輪片も認められた。

A 奈良・平安時代の土器 (第15図、図版5)

奈良時代から平安時代初頭にかけての土器はSD 2289とその下層の奈良時代包含層(灰黒色粘質土)、上層の平安時代包含層(灰青色混砂粘土)からまとまって出土している。奈良時代包含層には平城宮Ⅲ～Ⅳの土器(7～18)を含み、SD 2289出土の土器(1～5)は平安時代初頭に位置づけられる。(6)は平安時代包含層から出土した。

須恵器杯B(1) 断面逆台形の高台をつける。内外面ともにロクロによる横ナデ調整が施されており、外底面にはへら切り痕が認められる。暗灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口径13.0 cm、器高4.5 cm。

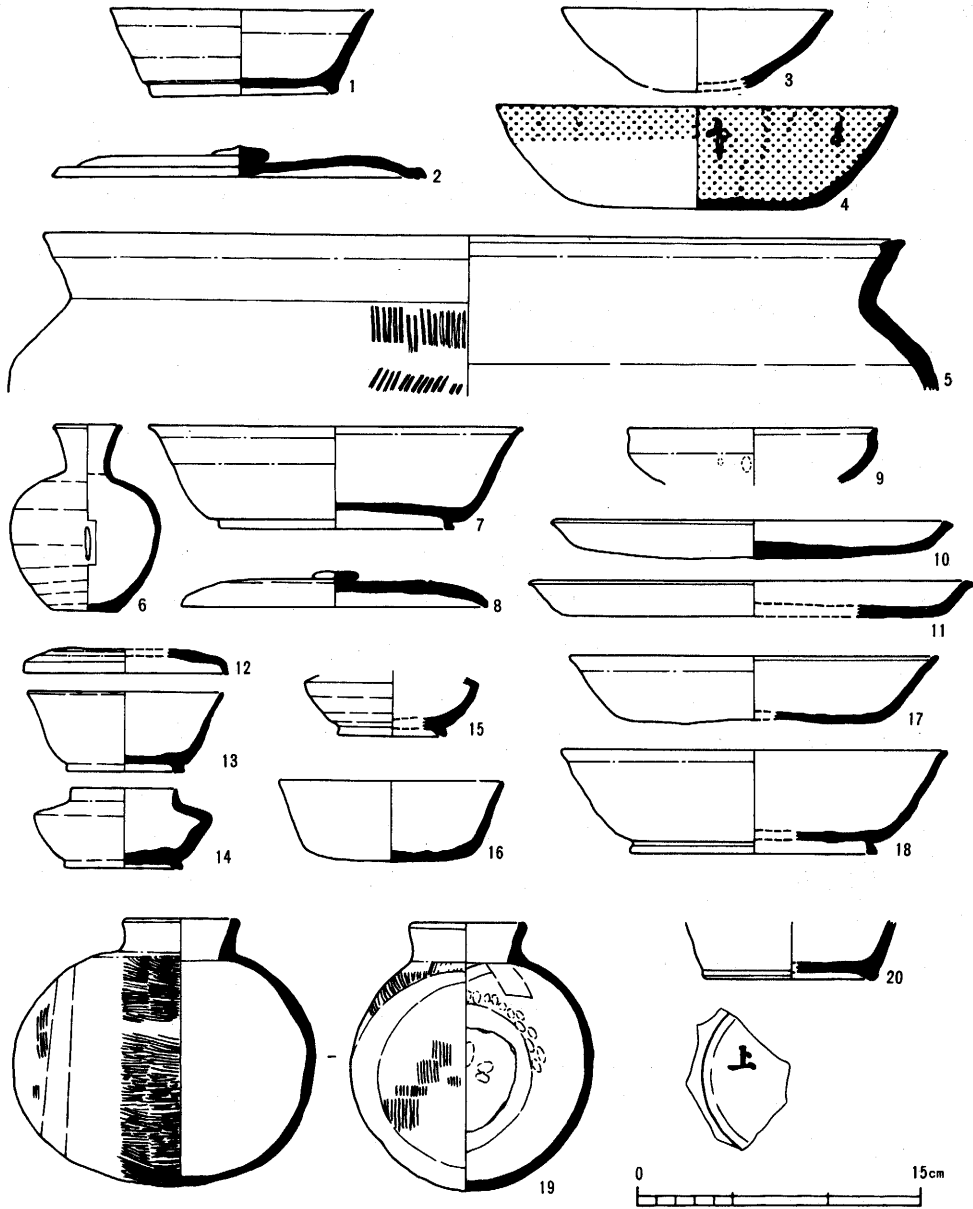
須恵器杯B蓋(2) 全面にロクロによる横ナデ調整が施されており、口縁端部外面には重ね焼きの痕跡が認められる。灰青色を呈し、黒紫色斑が見られる。胎土・焼成とも良好である。口径19.4 cm、器高1.6 cm。

土師器碗A(3) 底部を欠いている。内面と口縁部外面に横ナデが施されている。淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。復原口径14.1 cm。

黒色土器碗(4) 内面だけ黒色のA類の碗である。広く水平な底部に内彎気味にたちあがる口縁部をもつ。内面と口縁部外面には丁寧なへら磨きが施され、内面はそこからせん状の暗文が施されている。外面は口縁部より下は暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。復原口径20.8 cm、器高5.4 cm。

須恵器甕C(5) 外面は肩部から胴部にかけて縦方向の粗い平行線叩きが施され、口縁部内外面と肩部内面には横ナデが施されている。淡青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。復原口径45.6 cm。

須恵器小型壺(6) ゆるやかな逆八の字状にひろく口縁部、やや肩のはった胴部、水平な底部をもつ。全面にロクロによる横ナデが施され、底部には糸切り痕を残す。灰色を呈し、白色砂粒や黒紫色斑が多く認められる。焼成は良好である。口径3.6 cm、胴部最大径7.9 cm、器高9.7 cm。



第15図 奈良・平安時代の土器（ $\frac{1}{4}$ 、19のみ $\frac{1}{8}$ ）

須恵器杯B（7） 高台は比較的高く、外側に肥厚する。内外面はロクロによる横ナデが施されるが、底部外面はヘラ切り痕を残し、未調整である。全体に器壁は薄い。青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口径19.4 cm、器高5.4 cm。

須恵器杯B蓋（8） 杯蓋の内面を硯として用いた、いわゆる転用硯である。天井部外面は回転によるヘラ削りが施され、口縁部外面と内面にはロクロによるナデ調整が施されている。灰色を呈し、黒紫色斑が認められる。胎土・焼成ともに良好である。復原口径15.8 cm、器高1.9

cm。

土師器碗C (9) 口縁部内外面には横ナデが施されているが、体部外面は未調整である。赤褐色を呈し、細かな白色砂粒や金雲母片がやや目立つ。焼成は良好である。復原口径 13.1 cm。

須恵器皿C (10・11) 口縁部は斜上方にまっすぐ立ちあがり、端部は面をなしている。内面と口縁部外面はロクロによる横ナデ、底部はヘラ削りが施されている。10は明灰色を呈し、復原口径 21.1 cm、器高 2.0 cm、11は灰白色を呈し、焼成はやや軟弱で、復原口径 23.2 cm、器高 1.9 cm。

須恵器杯B IV蓋 (12) 天井部外面はロクロによるヘラ削りが施され、内面と口縁部外面にはロクロによる横ナデが施されている。灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。復原口径 10.8 cm。

須恵器杯B IV (13) 全体にロクロによる横ナデが施され、底部外面にはヘラ切り痕が認められる。明灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。復原口径 10.4 cm。

須恵器小型壺 (14・15) く字状に折れ曲る口縁部、明瞭な稜を有する肩部をもつ。14は内面と底部を除く外面はロクロによる横ナデが施され、底部外面にはヘラ切り痕が認められる。14は灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好、15は外面明赤褐色を呈し、一部に自然釉がかかる。14の復原口径 5.4 cm、胴部最大径 9.3 cm、器高 4.2 cm

須恵器碗A (16) 内面と口縁部外面にはロクロによる横ナデが施され、底部外面はヘラ切りのあと、×字状のヘラ記号がつけられている。灰白色を呈し、胎土は精良であるが、焼成はやや軟弱である。口径 11.8 cm、器高 4.2 cm。

須恵器杯C (17) 内面と口縁部外面にロクロによる横ナデが施され、底部外面にはヘラ切り痕が認められる。淡灰青色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。復原口径 29.4 cm。

須恵器杯B (18) 高台は高くて幅がせまい。全体にロクロによる横ナデが施されている。明灰色を呈し、焼成はやや軟弱である。復原口径 20.4 cm。

須恵器横瓶 (19) SG 2288 A下層の出土である。やや細長い球形の胴部に短かく外反する。口縁部がつく。胴部外面は平行線叩きが施され、赤色顔料が塗布されている。

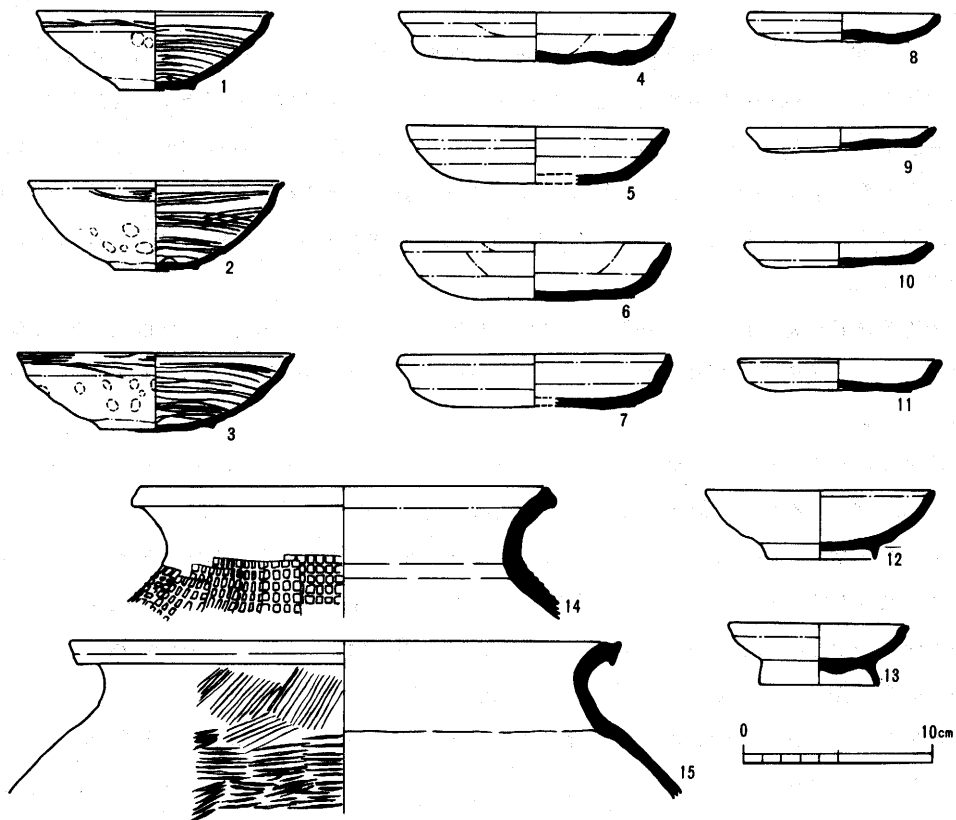
このほかに、墨書土器 (20) がある。須恵器杯Bの底部外面の高台寄りに「上」と書かれている。

B 中世の土器 (第16~18図、図版6・7)

中世の土器はSE 2313、SK 2312、SE 2310から比較的まとまって出土している。前者は瓦器の型式から13世紀後半、後二者は土師器皿や日常雑器の組み合わせから、おおまかに16世紀前半に位置づけられる。

SE 2313 出土の土器 (第16図、図版6)

瓦器碗 (1~3) 高台が断面三角形を呈し、貼り付け痕跡を明瞭に残している。低すぎて



第16図 S E 2313 出土土器 (1/4)

高台としての機能を果たしていないと言える。外面は体部に部分的に指頭圧痕を残し、口縁部は横ナデのあと、まばらな横方向の暗文が施されている。内面は口縁端部にやや深い沈線が認められ、ナデ調整の上に底部から口縁部にかけて渦巻き状の暗文が一気に施されている。1は胎土に細かい白色砂粒と若干大きな砂粒を僅かに含み、色調は内外面ともに暗灰色を呈する。復原口径12.2cm、器高4.1cm。2は胎土に細かい白色砂粒・赤褐色クサリ礫を含み、内外面ともに灰色を呈す。復原口径13.6cm、器高4.6cm。3は胎土・色調は2と同じで、口径14.4cm、器高4.1cm。

土師器皿(4~11) 法量によって2つのタイプに分けられる。口径14cm前後のもの(4~7)と9.5~10cmのもの(8~11)である。4~7では口縁部内外面を外反気味に1~2度強くナデたあと、端部に内彎気味の横ナデが施されている。8~11は口縁部内外面、体部内面同時に一次の強い横ナデが施されている。4は胎土に金雲母片・白色砂粒を含み、色調が淡黄褐色で白土器系統であるが、5・6・7は胎土に金雲母片・白色砂粒・赤褐色クサリ礫を含み、赤褐色または明赤褐色を呈する赤土器系統で、8~11も同様である。

土師器台付椀(12・13) 12は断面三角形のやや高い高台をつける。胎土は金雲母細片・白色砂粒を含み、色調は淡灰褐色を呈す。口径12.0cm、器高3.6cm。13は高さ1.2cmのかなり高い高台をつける。口縁部内外面は横ナデが施されているが、体部外面は未調整である。底部外面は高台の貼り付け痕跡をナデで丁寧に消している。胎土には金雲母細片・白色砂粒を含む。色調は淡赤褐色を呈し、淡灰褐色の部分もある。口径9.3cm、器高3.2cm、台径6.2cm。

須恵質甕(14) 口縁はくの字状に外反し、端部は外下方に僅かに肥厚する。胴部は細長い球形を呈すと考えられる。口縁端部内面と口縁部外面に横ナデが施される。胴部外面には格子叩きが時計廻り方向に施され、内面には口縁部との境に横方向のヘラ削りが施されている。胎土には白色砂粒若干と金雲母細片を含むだけで精良、焼成は軟弱で、色調は内面が灰黒色、外面と断面が暗灰白色である。復原口径21.4cm。

土師質甕(15) 口縁部は短かくくの字状に外反し、端部は尖り気味に垂下する。胴部は球形を呈すと考えられる。外面は胴部から口縁部下半にかけて細かな平行叩きが施され、口縁部上半では横ナデによりこれが消されている。胎土にはやや大きな白色砂粒と赤色クサリ礫を多く含む。色調は外面と口縁部内面が灰黒色、内面が赤褐色で、器面が剥離している。復原口径29.0cm。

SK 2312 出土の土器(第17図、図版7)

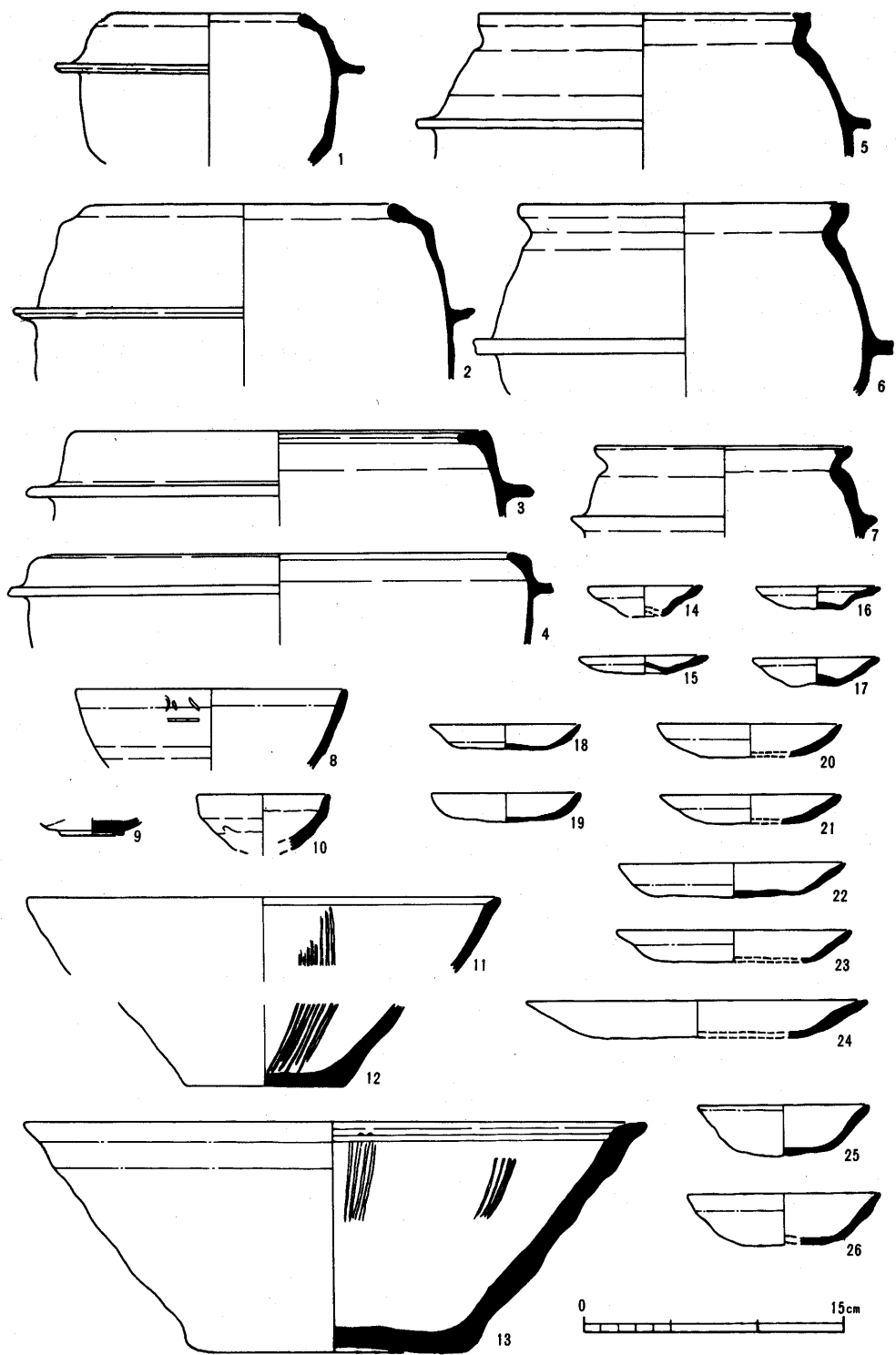
土師質土釜(1~7) 口縁部が内彎するもの(1~4)とくの字状に外反するもの(5~7)に分けられる。1・2と3・4は口縁部の形態が異なるが、端部はいずれも内側に粘土を接ぎ足して成形している。5~7の口縁端部は内面に肥厚するが、成形技法は明らかでない。胎土は1・3・4が明灰褐色を呈し、微細な白色砂粒やチャート片を含む。2・5・6・7は明赤褐色を呈し、白色砂粒と灰色チャート片・金雲母細片・赤褐色クサリ礫を含む。復原口径は1が17.8cm、2が26.6cm、3が29.2cm、4が31.4cm、5が26.2cm、6が24.2cm、7が17.6cm。

青磁椀(8) 口縁端部は丸くおさまり、体部下半にはヘラ削り、口縁部には横ナデが施されやや厚く施釉されている。口縁部外面には雷文が簡略化されたいわゆるラマ式蓮弁文の文様帯が見られる。中国産輸入磁器で、明代のものであろう。

陶器皿(9) 美濃・瀬戸系の小型皿の底部と考えられる。断面三角形の低い高台をもつ。内底面にはやや厚く釉が施されているが、底部外面には認められない。釉は暗緑色を呈し、貫入が著しい。復原台径3.6cm。

天目茶椀(10) 通常のものよりかなり小さい小型品である。高台部分を欠失している。口縁部はやや垂直に立ちあがり、端部は丸くおさまる。内面と口縁部・体部外面の一部に茶色混りの黒褐色釉が施されている。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒を若干含む。復原口径7.6cm。

瓦質播鉢(11・12) 11は口縁部で、端部は外反気味に丸くおさまる。12は底部で、安定した平底をもち、内面は1単位8本の播り目を6単位残している。内面には使用による磨耗が認



第17圖 SK 2312 出土土器 (1/4)

められる。色調は全体に灰黒色である。胎土は灰褐色を呈し、細かな白色砂粒を含むが精良である。11の復原口径27.2 cm。

土師質播鉢(13) 信楽産と考えられる大型の播鉢である。斜上方にまっすぐ立ちあがる口縁部と外反気味におさまる端部、安定した平底をもつ。外面に粘土紐による輪積み成形痕跡を残しており、粘土の接ぎ目は不安定方向のナデで消され、口縁部は横ナデが施されている。内面は口縁端部直下に横方向の沈線が1条施され、4本1単位の播り目がつけられているが、体部から底部にかけては使用による磨耗が著しい。胎土は明灰褐色を呈し、粗い白色砂粒を多量に含み、赤褐色クサリ礫も認められる。復原口径36.0 cm、底径16.0 cm。

土師器皿(14~26) 法量によって7つのタイプに分けられる。径6.5 cmのもの(14)、径7~7.5 cm(15~17)、径8.5 cm前後のもの(18・19) 径9.5~10 cmのもの(20・21)、径13 cm前後のもの(22・23)、径19 cm前後のもの(24) であるが、この他に碗状の深いもの(25・26)がある。14~17は底部を押し上げたいわゆるヘソ皿タイプのもので、14では特にそれが著しく口径の減少をひきおこしている。胎土は微細な白色砂粒やや大きな灰色砂粒を含むが、14・15では赤褐色クサリ礫の含有が著しく、淡赤褐色を呈す。16・17の胎土は灰褐色を呈す。18~21は体部と底部の間の稜が明瞭でないのを特徴とする。いずれも微細な白色砂粒を含むだけの精良な胎土で、色調は灰白褐色を呈する。22・23は器壁が薄く、体部は底部から斜上方に折れ曲るように立ち上がるのを特徴とする。胎土は精良で灰白褐色を呈する。24は大型の皿で胎土・焼成とも良好。1点だけで、口縁の $\frac{1}{10}$ ほどしか残存していない。色調は灰白褐色を呈し、底部外面は黒変している。25・26は深い碗状の皿である。25は口径9.8 cmで、内面に工具による横ナデが認められる。胎土は明赤褐色を呈し、微細な白色砂粒と赤褐色クサリ礫を多く含む。26は復原口径11.2 cmで、口縁部内外面にナデを施す。胎土は灰赤褐色を呈し、赤褐色クサリ礫を含む。

SE 2310 出土の土器(第18図、図版7)

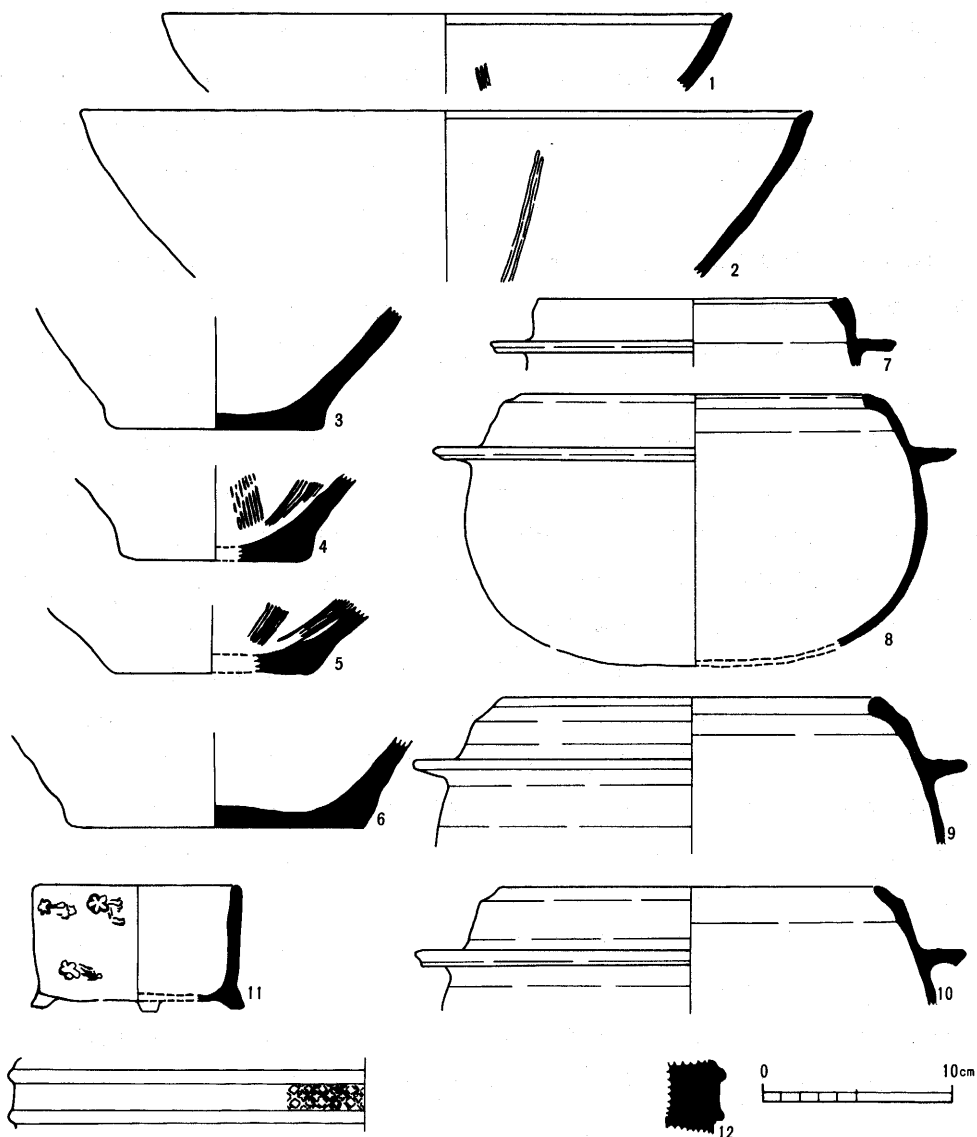
瓦質播鉢(1~5) 1・2は口縁部、3~5は底部である。口縁端部が僅かに外反し、内彎気味の体部と安定した平底の底部をもつ。1は内外面ともに灰黒色で、胎土は灰白色を呈し、白色砂粒を多く含む。2は暗灰褐色で、胎土は灰白褐色を呈し、やはり白色砂粒が多い。両者とも焼成が軟弱で、表面の剥離が著しいが、播り目が僅かに認められる。1の復原口径29.6 cm。2の復原口径38.4 cm。3は内面の剥離が著しいが、播り目が僅かに残存する。外面灰黒色で、胎土は淡赤褐色を呈し、白色砂粒とともに赤色クサリ礫を含む。4・5は内面に幾単位かの播り目を残しているが、5は1単位8本である。ともに外面灰黒色で、胎土には白色砂粒を含み、内面は使用による磨耗が著しい。

土師質播鉢(6) 底部のみ残存する。器壁の厚い安定した平底で、胎土は明灰褐色を呈し、大きな白色砂粒や透明な赤色砂粒を多く含む。内面は使用による磨耗が著しい。信楽産のものであろう。

土師質土釜(7~10) いずれも口縁部が内彎するタイプのものであるが、7・8・10が内

側に粘土を接ぎ足して、指ナデによって口縁端部をつくり出しているのに対し、9は外側に折り曲げて端部を成形している。8の胴部外面と罍下部にはススが付着し、内面には有機物が炭化して付着する。いずれも胎土は精良で、淡褐色を呈する。復原罍径は7が21.2 cm、8が27.4 cm、9が29.2 cm、10が28.6 cm。

瓦質香炉（11） 口径10.5 cmのやや外に開き気味の筒状の体部に短い三脚を貼り付けている。脚部の貼り付けは5本の刻み目を底部裾につけて行っている。体部外面にはスタンプによる花卉文様が上下二列に印されている。外面は光沢のある灰黒色、内面は灰色を呈し、胎土は



第18図 S E 2310 出土土器 (1/4)

精良である。

瓦質火舎 (12) 下段の脚がとりつく部分の文様帯と底部の一部だけ残る。脚部は剥離痕跡があるが、高さや幅は不明である。外面は灰黒色を呈し、胎土は灰白色で白色砂粒を含むが精良である。文様帯部分での復原径 36.0 cm。

C. 陶磁器その他 (第19図、図版 8・9)

陶磁器は中国製輸入磁器 (1~7) と国産緑釉陶器 (8~10)、灰釉系陶器 (11・12) が出土している。

白磁小壺蓋 (1) SG 2288A 上層出土。天井部外面に陽出した花文をスタンプしている。復原径 5.9 cm。南宋代以降の中国南部の民窯の生産品であろう。

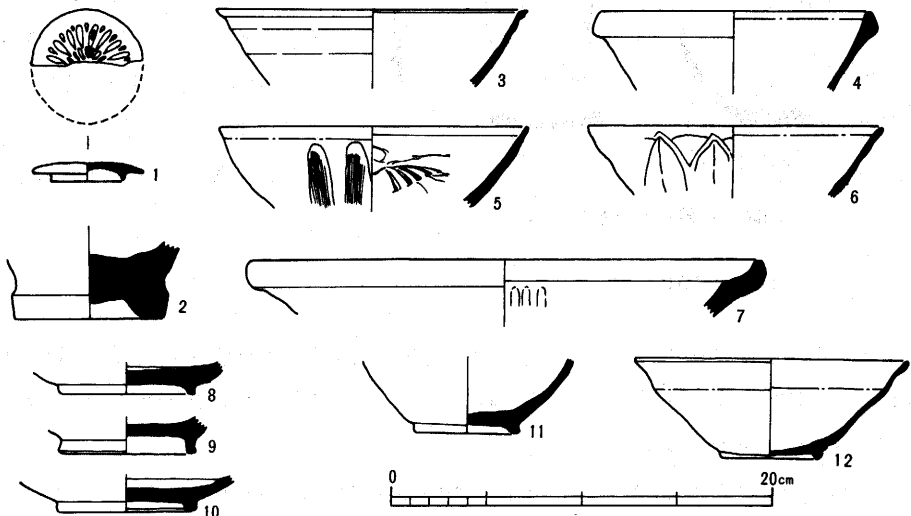
白磁四耳壺 (2) 底部だけしか残存していない。内面はロクロによる横ナデの後、施釉され、外面の高台付近は回転による粗いへう削りが施されている。高台径 7.8 cm。

白磁碗 (3) 口縁端は尖るように外反し、口縁部内外面に釉が見られる。大宰府白磁碗 V 類に相当するものであろう。復原口径 16.4 cm。

白磁碗 (4) 口縁端はいわゆる玉縁状に外側に肥厚し、外底面と高台周辺は施釉を行っていない。大宰府白磁碗 IV 類に相当する。復原口径 14.0 cm。

青磁碗 (5) 表採。外面は先端の丸い蓮弁を片切り彫りし、その中に 13 本 1 単位の櫛描き文を施す。内面は蓮花文様の葉の一部を残す。大宰府青磁碗 I-2・b 類に属するが、外面の蓮弁文が特異である。南宋代の竜泉窯系の窯の生産品である。復原口径 16.3 cm。

青磁碗 (6) 外面は鑄蓮弁文を片切り彫りにし、内面は無文のようである。大宰府青磁碗 I-5 類に属し、やはり南宋代の竜泉窯系の窯の生産品である。復原口径 26.8 cm。



第19図 陶磁器類 (1/4)

青磁盤（7） 口縁は折れ曲るように外反するが、端部は上に立ちあがる。内面は型押しによる菊弁文が見られる。明代のものであろう。復原口径 26.8 cm。

緑釉陶器（8～10） いずれも硬質で、皿または碗の底部と考えられる。9・10は全体に釉を施しているが、8は高台内面には施釉されていない。

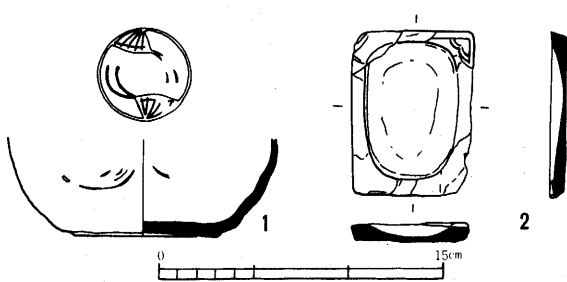
灰釉系陶器碗（11・12） いわゆる山茶碗と呼ばれているものである。斜上方にまっすぐひろく体部と口縁部をもつ。底部外面には糸切り痕と高台の貼りつけ痕跡を残している。内外面ともにナデ調整を行っているが、12の口縁部はやや強い横ナデが施されている。11は高台径 5.5 cm。12の復原口径 14.4 cm、復原高 5.2 cm、高台径 5.4 cm。

このほかに土馬と製塩土器が出土している（図版 9）。土馬は尻尾の部分と胴から首にかけての破片で、奈良時代後半の特徴を有している。製塩土器は器壁が厚くて、灰褐色あるいは赤褐色を呈し、粗い砂粒を比較的多く含む。内面に細かい布目を残しているものもあり、奈良時代のものである。

2. 木製品・石製品（第20図、図版 9）

漆塗木製碗（1） 口縁部を欠いているが、内彎気味にたちあがる体部と外面がやや凹んだ底部をもつ。全面に黒色の漆が施されており、内面の残存状態は比較的良好である。内底面には円の中に扇子様の図形を1対あしらった文様が朱褐色で描かれている。体部外面にも朱褐色で描いた円弧文様が認められるが、剥離のために明らかでない。底径 7.7 cm。

石製硯（2） S E 2313 出土。黒灰色を呈する片岩系の石材を加工してつくられている。平



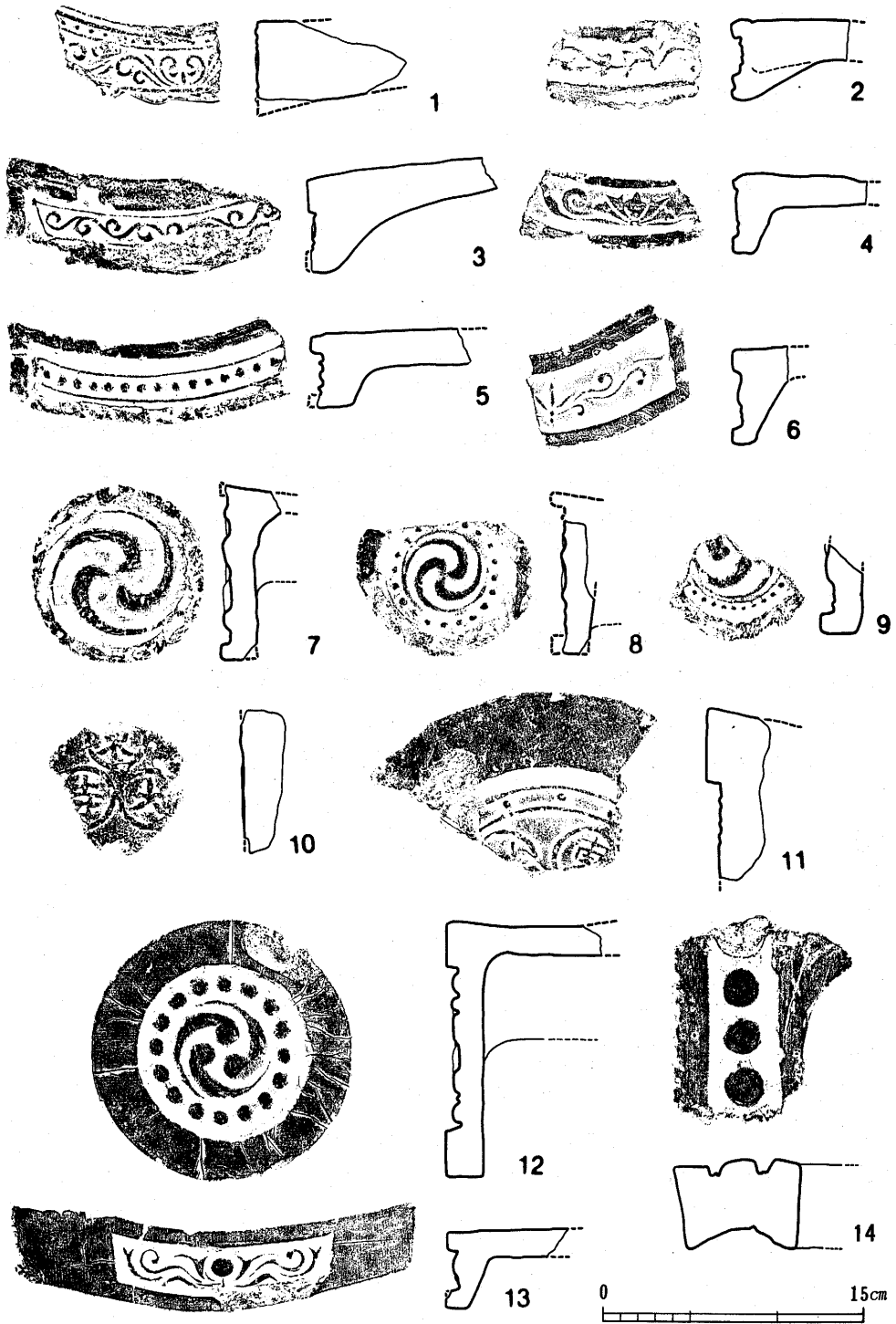
第20図 木製品・石製品（1/4）

面は細長い台形を呈する。陸の部分は使用によって大きく凹み、海の部分との境界が明瞭でない。外縁は一部しか残存していないが、彫り込まれた囲線の隅角部分と波状の文様が認められる。長辺約 6.5 cm、短辺約 6.0 cm、側辺約 8.3 cm、高さ 1.0 cm。

3. 瓦（第21図、図版 10）

瓦の量は発掘面積に比してさほど多くない。種類は軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦（鬼瓦）・平瓦・丸瓦で、時代は奈良（後期）から現代におよんでいる。ほとんどが包含層からの出土である。ここでは軒瓦と鬼瓦だけ説明を加える。

珠文縁均整唐草文軒平瓦（1） S D 2289 南側の堆積層出土。内区中心飾りの花頭が三本に分離し、基部がなくなっている。珠文は上外区だけしか残っていないが、密に配置されている。



第21图 軒瓦・鬼瓦 (1/4)

瓦当寄り凹面は横位ヘラ削り、凸面は縦位ヘラ削りが施されている。胎土は灰白色を呈しており、白色砂粒と赤色クサリ礫が若干含まれている。瓦当文様は平城宮6721G型式に相当し、平城宮軒瓦編年第三期に位置づけられる。

唐草文軒平瓦(2) 主文は左から右に流れる唐草であるが、単位文様の表現は意識されなくなり、樹枝状に変化している。瓦当寄り凹面は布目が残り、顎部は縦位ヘラ削りが施されていて、平瓦部との接合痕跡を横位のナデで消している。胎土は明灰褐色を呈し、細かな白色砂粒・金雲母片のほかに比較的大きな砂粒を含む。

唐草文軒平瓦(3) 内区主文は右から左に7回反転して流れる唐草で、これを一本の界線で囲んでいる。周縁は高くないが、平坦で幅広い。凹面には布目を残し、凸面は縦位ナデ調整、顎部は横位ナデ調整が施されている。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒・金雲母片を多く含む。

連珠文軒平瓦(4) 内区と上外区・下外区との間には界線があるが、脇区との間の界線が省略されている。周縁は比較的高く、平坦である。凹面は布目が残り、瓦当寄りが横方向にヘラ削りされている。凸面は縦位ナデで調整され、顎部は横位のナデが施されている。胎土は灰色を呈し、やや大きな白色砂粒と金雲母細片・黒紫色斑を含む。

唐草文軒平瓦(5) 半截花文状の中心飾りをもつ。周縁は上方よりも下方が突出している。胎土は灰色を呈し、金雲母片・白色砂粒・赤褐色クサリ礫を含む。

唐草文軒平瓦(6) SG2288C堆積土上層出土。三葉形の中心飾りを持ち、唐草も波濤状に表現されている。胎土は暗灰色を呈し、白色砂粒。黒紫色斑を僅かに含むが精良である。

巴文軒丸瓦(7~9) 7は外区に珠文をもたないが、8・9は外区に珠文があり、特に9は密である。7は瓦当面に範の木目の跡を残している。7の胎土は灰褐色を呈し、比較的大きな白色砂粒を多く含んでいる。8・9は胎土が灰色を呈し、比較的大きな砂粒や金雲母片を含んでいる。

東大寺銘軒丸瓦(10・11) 10はSK2312出土。主文は三つの円圈の中にそれぞれ「東」「大」「寺」の三文字をあしらったものである。11は外区に珠文をめぐらせていて、大ぶりで周縁も幅広い。どちらも胎土は灰色を呈し、白色砂粒・黒紫色斑を含む。

巴文軒丸瓦(12)と唐草文軒平瓦(13)はともに胎土が灰色を呈し、白色砂粒と黒紫色斑、若干の大きな砂粒を含んでいて、灰黒色の色調と光澤も共通する。おそらくはセットをなすものであり、近世~近代にかけて製作されたと考えられる。

鬼瓦(14) 右脚部の珠文3個と刳り込みだけ残存している。刳り込みと裏面はヘラ削り痕跡が顕著である。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒・金雲母細片のほかにやや大きな砂粒を含む。

(坪之内 徹)

VI. おわりに

家政学部・一般教養棟の新営工事に伴う発掘調査の着手から今日まで、一年有半の月日が経過しました。

この概報刊行の機会に、この間、大学内外の皆様、特に奈良国立文化財研究所や県・市の教育委員会、から頂いた御助力と御鞭撻につきまして、発掘調査会として重ねて御礼を申上げる次第です。

くわしくは前章までに記述されているところですが、この発掘調査を通じまして、本学敷地には古代平城京の外京が造営されて後、平安・鎌倉・室町・江戸などの各時代を通じて数々の歴史的な遺構・遺物が見出されました。具体的にはその代表として鎌倉時代の頃にさかのぼる庭園の遺構（曲流する佐保川の水を生かしたように思われるもの）があり、ほかに注目し得る遺物の出土も少なくありません。これが日本の都市史や庭園史などに与える知見は豊かなものがあります。

したがって、この発掘調査から後、昭和57年春季を中心に行なわれました講堂や大学院棟の新営工事に関する調査も、今後、出土遺物の検討などを重ねることにより、学界を始めとする各方面に多くの知見を与えるものと思われます。また、さらに今後の構想であります理学部棟の増築を始めとした、学内建築施設の新営にもなると考えられる諸発掘調査も、古代の平城京から今日に至るこの地の歴史に数々の脚光をあてるものと期待されます。

その意味からも、平城京外京という「周知の遺跡」に立地した本学が当面する「歴史的遺構の発掘調査問題」は今やミッドウェイにあるといえるでしょう。

また、建築が進んでいる大学院棟と講堂も、新営にとまなう事前の発掘調査こそ終わっていませんが、その成果を社会へ報告するのに必要な諸作業はこれからに残された課題というのが現状です。

古都「奈良」にあって研究・教育を通じ社会に貢献することを使命とする本学としてこれ等の調査の成果を世に問うことは、社会からの期待にこたえるところと思われます。そして、今後の大学整備と共に進む事前発掘調査の成果の解明と公表は本学が当面する課題のひとつに数えても誤りないと存じます。関係者各位から調査会の活動に対する一層の御理解と御協力を切望しながら、この発掘調査概報「あとがき」の筆をおかせて頂く次第です。

昭和58年3月

発掘調査会委員長 近藤公夫

奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会

委員長	近藤公夫	(家政学部教授)
委員	出口庄佑	(文学部教授)
	佐藤宗諄	(文学部助教授)
	村田修三	(文学部助教授)
	千田稔	(文学部助教授)
	横村英一	(理学部教授)
	菅沼孝之	(理学部助教授)
	扇田信	(家政学部教授・前委員長)
	深作光貞	(家政学部教授)
	川上良博	(事務局長)
	元委員	永沢耿
西村一朗		(家政学部助教授)
安田愈		(前事務局長)

学外委員 山本忠尚 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
考古第三調査室長)

山口凱之 (奈良県教育委員会文化財保存課長)

元学外委員 和田元二 (前奈良県教育委員会文化財保存課長)

鬼頭清明 (奈良国立文化財研究所歴史研究室長)

図版 1
調査地周辺航空写真（一九 年撮影）

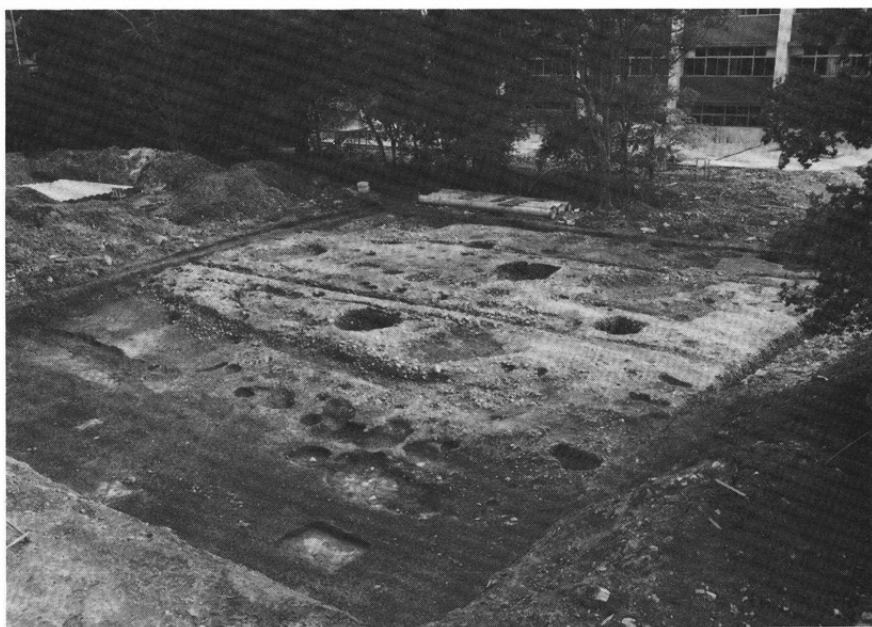


1



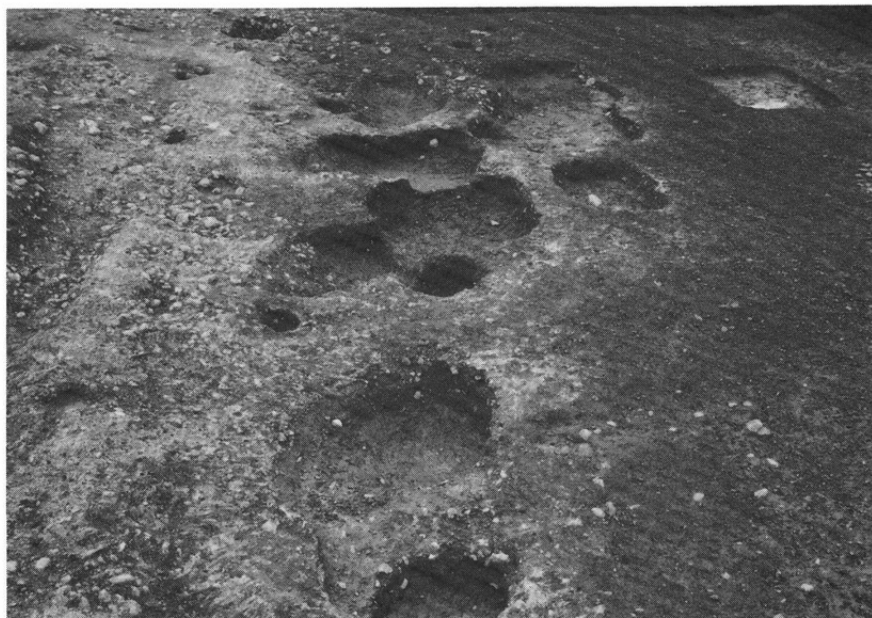
C期遺構全景
(東から)

2



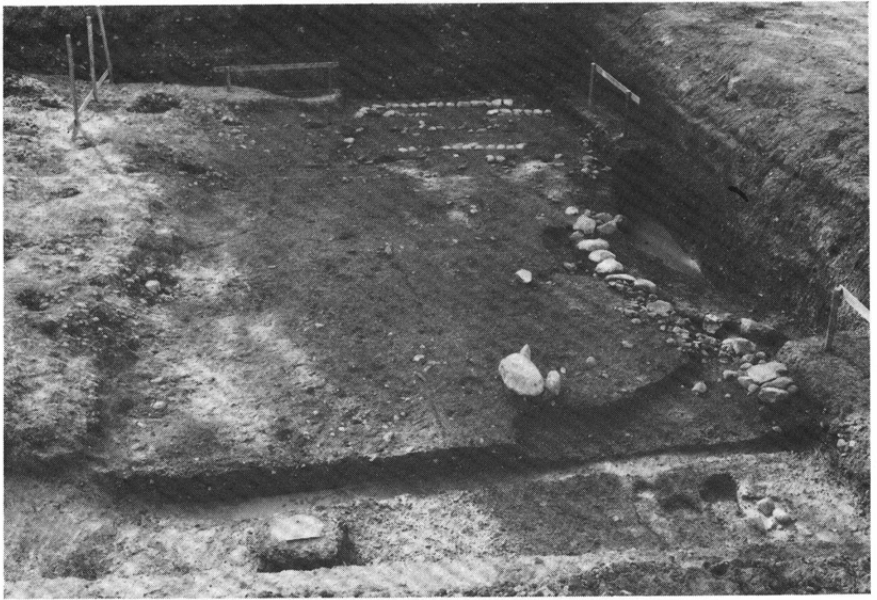
C期遺構全景
(西北から)

3



西北部土壌群
(東から)

1



B期遺構全景
(東から)

2



B期遺構
S B 2291など
(東から)

3



B期遺構
S B 2291など
(東南から)



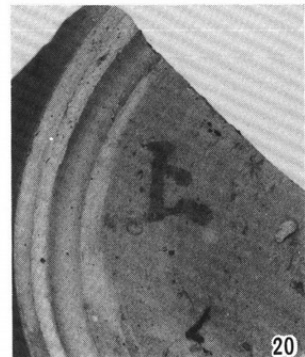
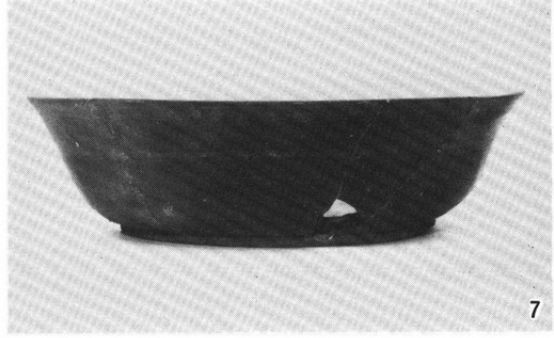
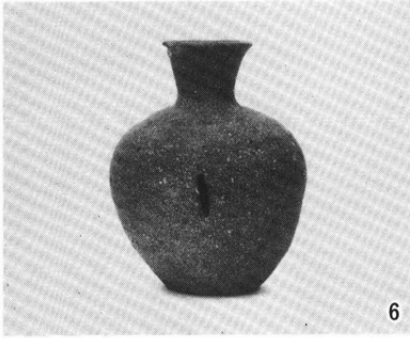
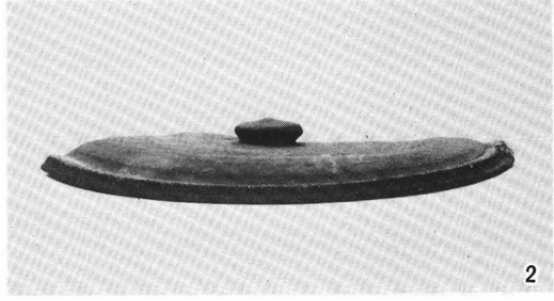
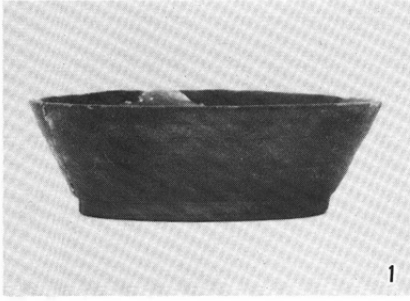
1 A・B期遺構全景：CG 2288, SD 2289（東から）



2 SD 2289細部（東から）



3 SG 2288BとSD 2290（東から）



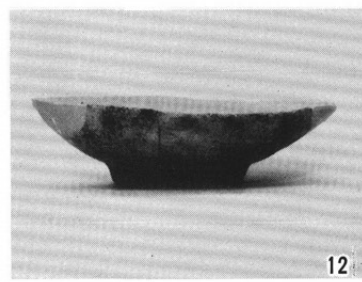
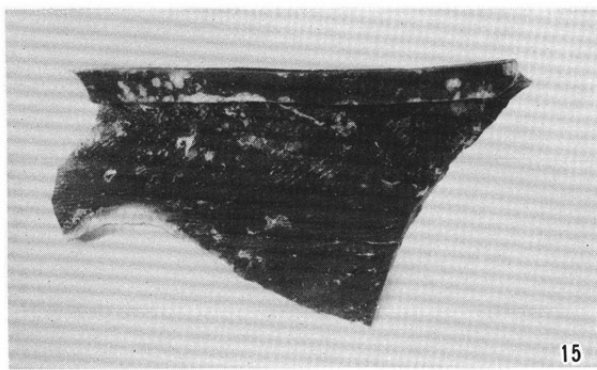
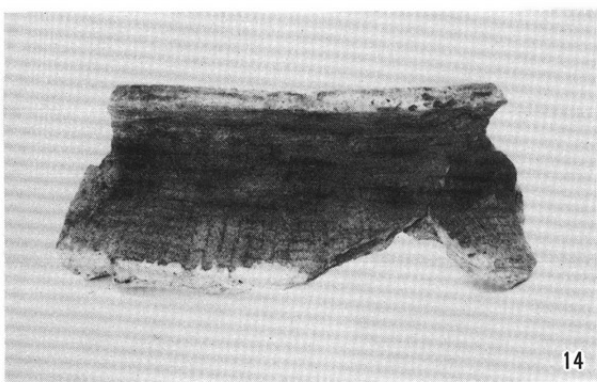
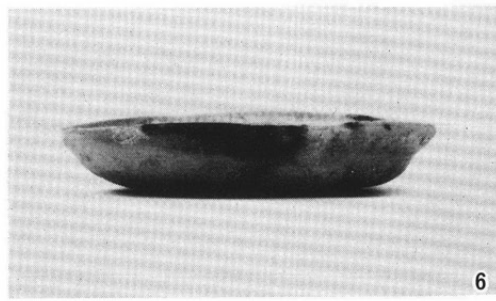
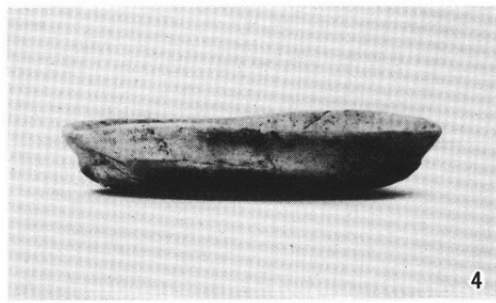
19

14

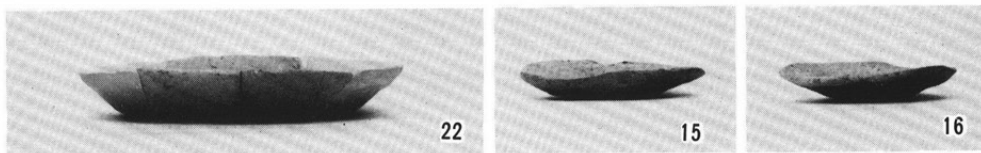
20

($\frac{1}{3}$, 19 : $\frac{1}{4}$, 20 : $\frac{1}{1}$)

SE 2313出土土器

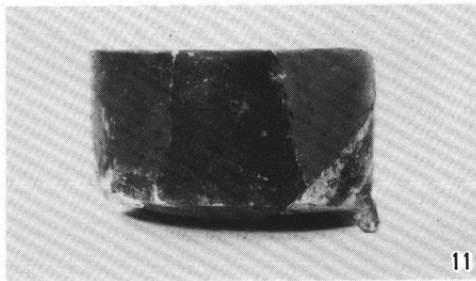
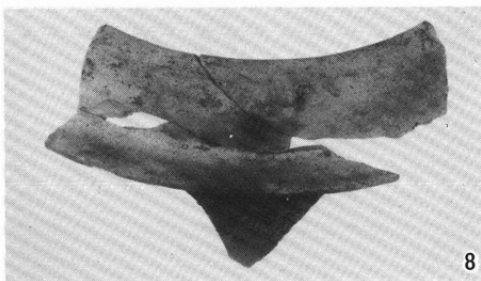


SK 2312出土土器

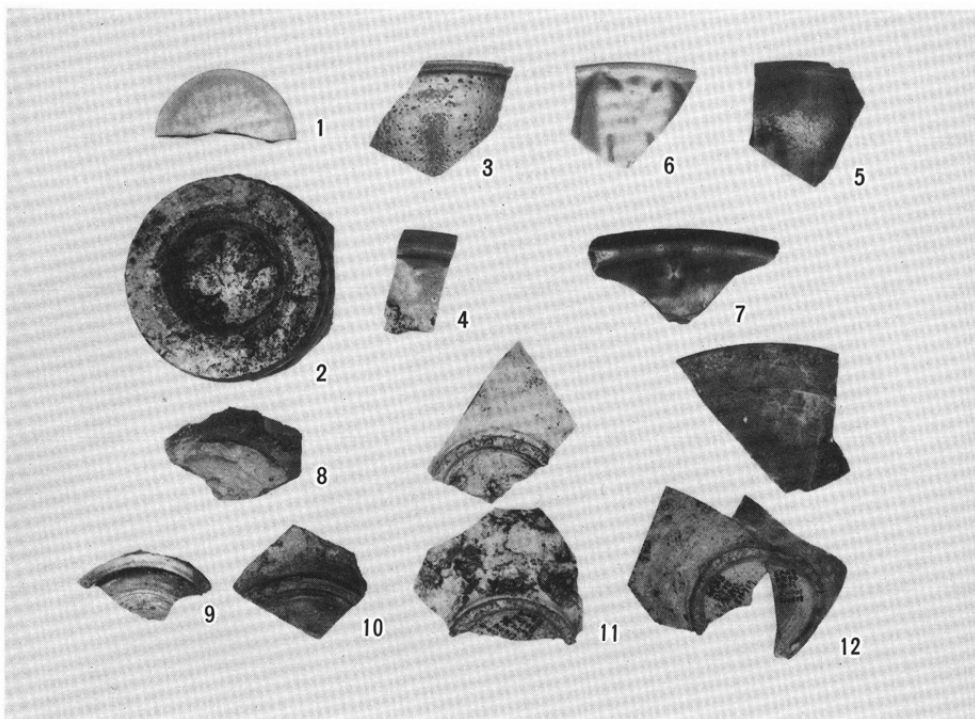


($\frac{1}{3}$, 13: $\frac{1}{4}$)

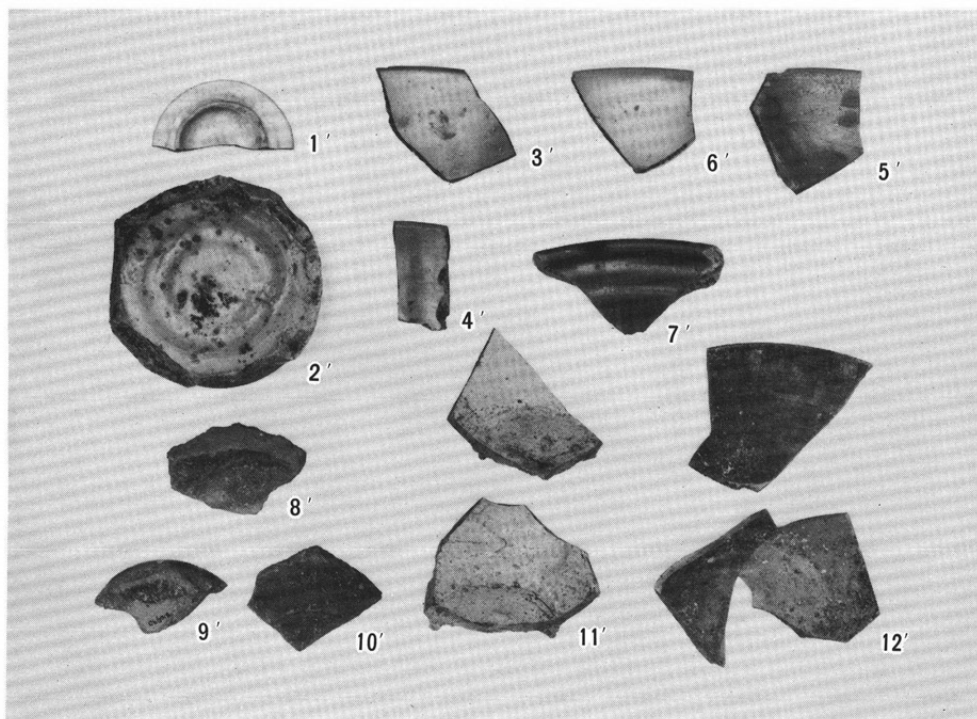
SE 2310出土土器

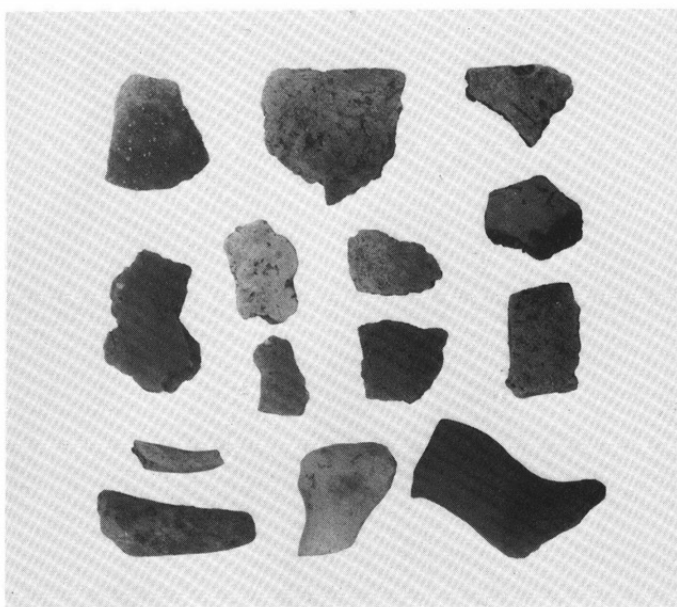


($\frac{1}{3}$)



(外面)
(内面)

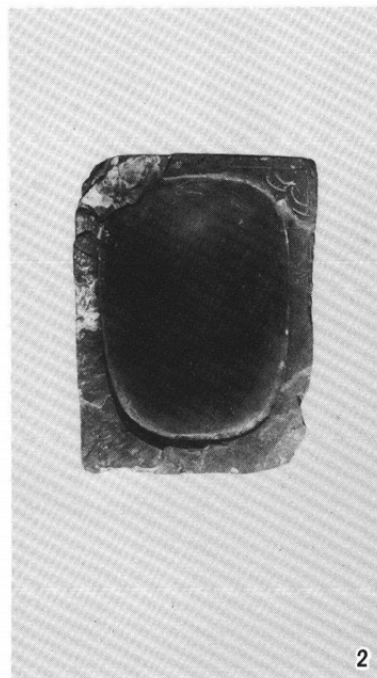
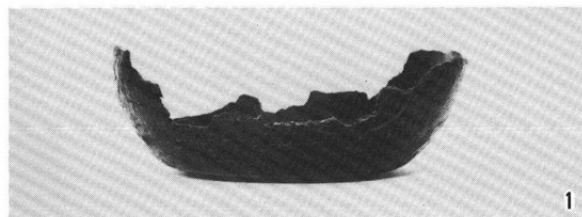
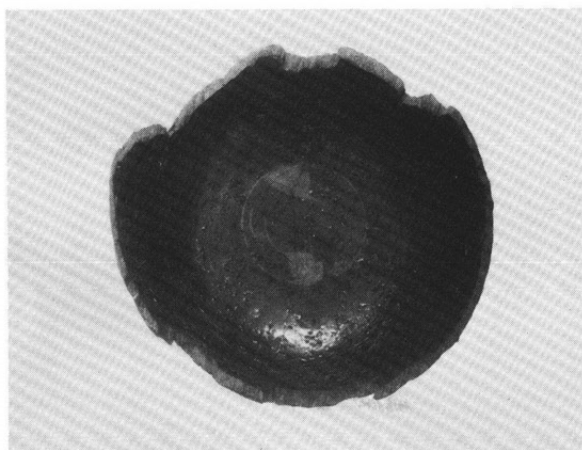




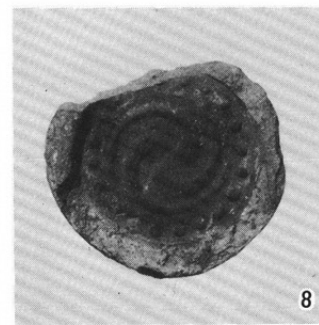
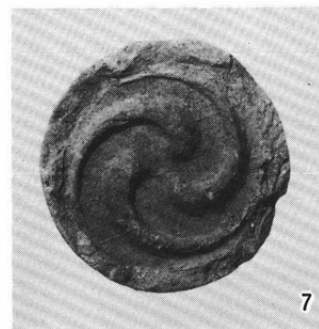
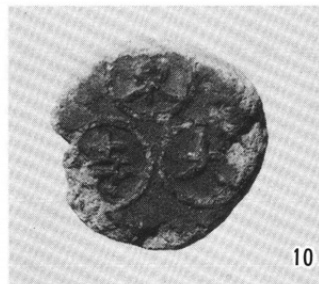
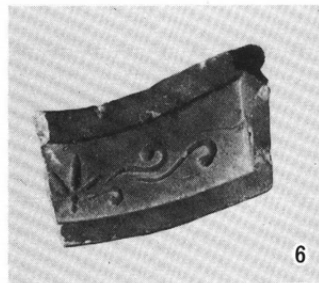
製塩土器・土馬

($\frac{1}{3}$)

木製品・石製品



(1 : $\frac{1}{3}$, 2 : $\frac{1}{2}$)



奈良女子大学構内遺跡

発掘調査概報 I

昭和58年3月31日発行

編集 奈良女子大学埋蔵文化財
発掘調査会

発行 奈良女子大学

印刷 共同精版印刷株式会社